

---

# 勇者と魔術師のぶらり世界旅行

リン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者と魔術師のぶらり世界旅行

### 【Nコード】

N1476Z

### 【作者名】

リン

### 【あらすじ】

魔王を倒し、世界を救った勇者と魔術師の話。それはもはや伝説と化していた。が、実は本当の話だった。ある事件をきっかけに、旅立つ決意をした勇者の末裔の王女、アイリーンと、魔術師の末裔で、物事にあまり興味のわかない冷めた青年ハルが、世界に散らばる魔王の魂を探し求める旅の物語です。

## 酒場での一幕

「眠り姫〜!?!」

街での噂話やもめごとを聞くなら、夜の酒場が一番情報が集中する。

と、いうわけで、あたしたちはいつものように酒盛りをしながら、目的の情報をさがしていたんだけど。

酒場のマスターから聞いた話は、子供でも知っているおとぎ話「眠り姫」の話だった。

「なあ、眠り姫って、あの有名なおとぎ話だろ? そのモチーフになったお城が、この先の森にあるっていうのか?」

相方のハルが、やたらきらきらした目でカウンターから身を乗り出す。

「こいつのことだから、たぶんろくなこと考えていない。どうせ、

「そんな伝説の姫を一目見たい!」

とか、「あわよくば……」ってとこだろう。なんせ彼は筋金入りの女好きだ。

「やっぱり美人なんだよな? 美人だよな!?! で、どこにあんだよその城!?!」

「い、いやあ、どっかっていうか、その森の奥深くに」

「奥深く、って、それじゃああんまりわかんないだろう? 地図とかないのかよ、地図!?!」

「それが城は確かにあるらしいんだが、そこまで辿り着けないらしいというか」

マスターがあまりのハルの剣幕におされている。そして、ハルのほ

うはというとますますヒートアップしている。

「やれやれ」

もうマスターにつかみかからん勢いだ。こうなると、ハルは止まらない。あたしは今まで飲んでいたワインを下に置き、腰にある剣に手をかける。そして。

「少し落ち着いて」

「ぐううえ

っ！！！」

あたしに横腹を剣の柄で殴られ、思わずカウンターに沈み込むハル。こうするとしばらく静かになる。

「ごめんなさい、連れがやかましくて。これではばらくは再起不能なんで」

「い、いや、再起不能って…。あんた、今何したの？」

「いえ何、ちよっとお灸を据えただけです。それより」

そう、今はこんな屍のことはどうだっていい。問題はさっき二人が話していた会話の中身だ。

「さつき、お城は見えるけど辿り着けないって、言っていましたよね。それってどういことなんですか？何か魔法がかかっている、とか？」「うん、どうやらそうらしい。街の若い連中とか旅のものとかが、やっぱり物珍しさで森に入るんだけど、なにか透明な壁みたいなものに阻まれて、それ以上進めないんだと」

なるほど、魔法の結界か。

「でもさ、もう300年も前の魔法でしょ？強力な魔法使いにならその術、もう解けるんじゃないの？」

そう、確かにこの世界には、強力な魔法というものが存在する。でも、時間が経てばさすがの強力魔法も劣化し、脆くなるはず、だ。でもマスターはあたしの問いに、首を横に振った。

「それが、どうもだめみたいなんだよ。ついこの前も、有名な魔法使いモナステ様が来たんだが、さっぱりだったみたいだな」

魔法使いモナステ、とは、この世界の10代魔法使いに数えられる一人で、魔力も魔術も決して申し分ない。そんな人がだめだとは…。

「…………こりゃあひよつとするとひよつとするかな」

「？何か言ったか？」

「ああ、何でもないです。独り言ですよ」

これは明日さつそく調査しに行かないといけない。と、いう訳で、あたしはもつと詳しい話を聞くべく、色んな人に聞きまわることにしたのだった。

あ、ちなみにハルはつつきどころが悪かったのか、そのまま目を覚まさなかった。

## 眠り姫に会いに…(1)

翌朝。

うつそうと木が生い茂る森の中に、あたしたちはいた。

昨日酒場で収穫した情報を確かめに森に入ったのだ。善は急げっことで早速。森の中は静寂に満ちていて、誰をも寄せ付けない神聖な空気が満ちていた。この先に魔法によって眠らされた運命の姫が眠るという場所に、まさにぴったりの森。

が。そんなもんはお構いなしとばかりに、あたしたちはずんずん進んでいく。

そして、男のほうはやけに不機嫌だった。

「まったく、ひどいよなお前は。仲間の腹を殴ったうえ、部屋に運ぶのが面倒だからって、外に放り出すんだもん。誰もいない孤独な空の下、俺は一人寒さに打ちひしがれ…。しかもカギも持ってなかったから部屋にも戻れず…。あ　　っ、俺ってかわいそう!!!」

そう言うと、やたら芝居がかった動きで髪をかき上げる。けど、あたしはそんな相方の様子をしれっとした表情で眺めていた。

確かに、彼が今言ったことは事実だ。気絶したハルを、まだ6月だとはいえ薄寒い星空のもとへと放り出した。が。あたしは知っていた。彼が目を覚ました後、どこに行ったのかを。

「へえ？孤独な空の下、ねえ？寒さに打ちひしがれ、ねえ？」

意味ありげにあたしはハルのほつをちらりと見やる。するとハルは、びくつと体を震わせた。

「え、え？何さその顔は。まるで、俺が悪いみたいそんな」

「そもそも！あんたが話の途中で勝手にヒートアップして！！情報収集の邪魔をするからいけないんでしょう！？それに、あんたが目覚めた後どうしたか、あたしが知らないとも思ってるの？」

あの酒場兼宿屋のお客は、宿屋の合鍵を渡される。つまり、例え外に放り出されても、あたしたちの部屋までは入れなくても、少なくともその力ギを使えば中には入ってこれる。

しかし、目を覚ました後の彼の行動は…。

「あんた、あたしが近くにいないのをいいことに、また女の子を捕まえにふらふら街をさまよってたでしょう」

すると、ハルは一步後ずさり、驚愕の表情を浮かべた。

「ななな、なぜそれを！！まさかお前、あんとき見てたのか！？」

「んなわけないでしょう。寝てたわよ夜なんだし。ただ、朝目が覚めて外を見たら、あんたがかわいいいい女の子といちゃいちゃしながら宿に帰ってきてたからね」

そう言うと、あたしは深いため息をついた。

「まあ確かに、今回はあたしもやりすぎたかなとは思っただけ。目を覚まさなかったし、ほんとうにヤツチャツタかな、とも思っただけどね。でも、そもそもあんたの異常なまでの女好きが原因なわけだし、少しは反省しなさいよね」

全く、彼の女好きは筋金入りだ。街に着けばとりあえず手当たり次第にナンパをし、朝になるまで帰ってこないこともざらだ。

これでハルがブ男ならあまり問題はないが、とにかく彼は目立つ容姿をしていた。

真っ赤に燃えるような赤い髪と瞳。人間離れした美しく、精悍な顔立ち。それなりに鍛え上げた体格。そんな奴に口説かれたら、確かに女の子はころっとおちる。そりゃあもう簡単に。

「とにかく、女の子と遊ぶのもほどほどにしときなさいよ。この前みたいなことはもうごめんだからね」

この前、とは、この街の前に立ち寄った場所でのこと。ハルがナンパした女の子が、あまりに彼のことを溺愛しすぎて、旅についてくると言い出したのだ。もちろんそれはできないと何度言っても彼女は聞かず、追いかけてきたので、仕方なしに全速力で走って振り切ってきたのだ。その時の彼女の執念といったら……。彼の仲間だといっただけで、あたしはその子に陰湿ないじめ（ご飯の中に虫が入っていたり、トイレに閉じ込められたり、とにかくくだらないこと）にあい苦労したのだ。

「分かってるって。だから今回は、ちゃんと後腐れないように遊んだからさ」

そついう問題なのだろうか……。この態度を見る限り、今までの態度を改める気は全くないらしい。

「んで、さ。そろそろ着くころだと思っぜ、その、姫の眠る城ってのこれ」

さっきまであんなにあたしに恨みがましい目線を送ってたのに。昨夜聞いたおとぎ話の姫に早く会いたいとばかりに、彼は嬉しそうにそう言った。心なしか、早足が更に早足になっている。少し遅れをとったあたしはそれに呆れつつも、彼の後を追う。

「はあ。まあいいや。どうせあなたの女の子大好き病が治るはずないし。…んで、あなたがそういうってことは、魔力、感じるのね？」

あたしがハルにこう聞くと、

「ああ。このあたり一帯に、びんびん感じるね」

ハルはにやりと笑みを浮かべた。

お城は何百年もたった今でも力の衰えない強力な魔法により封じられている。魔力を感知する能力を持つハルは、その魔力の強さと大体の魔法の位置を感じ取ることができるのだ。

逆にあたしは全く魔力を感じる事ができないので（魔法も全く使えないし）、こういう時はハルに頼るしかない。

「俺の予想だと…この先に魔力の壁があるはずだ。城とこの森を隔てる魔法がな」

そして彼はまっすぐ先を指さす。その先は更に暗く、見る者を不安にさせる。だが不安がっている場合ではない。ハルがそう言うなら、その先に目的のものがあるはず。それに、いかにもなにかあります、という感じがぶんぶんしている。

やがて件の城を目指すべく、その暗い先へと足を踏み入れるとそこ

には。

「……わぁお」

「これが伝説の……」

目の前に広がっていた景色は、まさしくあたしたちが予想していた通りのものだった。

そこに足を踏み入れると、まず最初にぱつと視界が開けた。今まで周りを覆っていた木々は消え、代わりに眼下に現れたの探し求めていた大きな大きな城だった。

もとは美しいお城だったのだろう。噂によると、300年前、城が封じられる前は、美しき白亜の城として周りに名をはせていたらしい。しかし今は見るも無残な姿だった。

建物のうちのいくつかは崩れ落ち、地面にその残骸が転がっている。白い壁ははがれおち、茶色い土がむき出しの部分も多い。城の周りには細い蔦で覆われており、今やその美しき面影はない。かろうじてお城であったもの、と分かる、廃墟に近い感じだった。

「こりゃあひどいわね」

「まあ、300年も経てばとくに耐久年数は過ぎてるし。それでもなんとか形を保ってるのは、封印のお陰かもな」

「おまけになんか城の周りだけ暗いし、これでガラスかコウモリでも飛んでたらある意味完璧だったかもね」

「廃墟」という意味では確かにそうかもしれない。横でハルがうんうんと頷いた。

「で。問題はここからね」

あたしはそう言つと、隣のハルに顔を向ける。

「どう？ 魔力の壁はあるの？」

すると彼はお城に向かって一直線に歩く。歩く。歩く。だが、ある一線のところから、彼は全く前に進めず、その場で足踏みをしておける状態になった。次にハルは自分の手を前にかざす。すると何か固いものにあたったようで、こぶしで叩くとコンコンとう音がした。

「おう、あるある。えらく固い見えない壁だよ。強い魔力と複雑な術で構成された、れっきとした高位魔法の封印だなこりゃあ」

「高位魔法」とは、昔使われていた魔法のことで、今やその使い手はごく限られた実力ある魔法使いや、ドラゴンなどの種族のみである。

この高位魔法は、使えばすさまじい力を発揮するが、術が難しく、また魔力も大量に消費するため、使い手が限られている。今巷で使われているのは、それを簡略化した魔法で、術も簡単で魔力の消費も少ないため、ほぼすべての人間が使うことができる。

「この高位魔法の術式と魔力の量が半端ないな。こりゃあとてもじゃないけどただの人間が作り出せる代物じゃない。ただまあ、例のアレがあれば話は別だ」

ハルはそう言つと、にやりと笑つた。

「おそらく俺たちの探し物はこの中にあるはずだ。この魔力の結界を壊し、姫の眠りを解けば解決だ」

しかし、300年もの間誰にも解けなかった封印である。そうやすやすと事が運ぶはずがない。だけどあたしたちの顔は確信に満ちていた。

あたしは静かにその手を右の剣にかける。そしてゆっくりと、鞘から己の剣を抜く。

それは刃こぼれ一つない、美しい銀色の刃をしていた。森の中のおずかな太陽光を浴び、きらきら輝く刃。その下にある柄には鮮やかな緑色の宝玉が埋め込まれている。また鍔には、繊細で複雑な装飾がなされていた。一目見れば、それが美しく高価なものであると分かる。だがそれは、ただ美しいだけではなかった。その剣の纏う空気には、若干の邪気と禍々しさが含まれていた。

「相変わらず不気味なオーラを放ってるなー」

ハルが苦笑しながらあたしの持つ剣を見つめる。

「まあ、呪われた魔剣だから仕方ないんじゃない？」

人が手にすると、絶大な力を与える代わりにその者の魂を喰らいつくす…。それがあたしの持つ剣である。けどそんな剣を手にしてもあたしはいたって平然。

そして何食わぬ顔で結界の前まで向かうと、剣を上構えた。

いままでどんなことをしても破れなかった結界。だけどそれがどうした。んなもん、この剣の前では無力に等しい。

「さあて、じゃあ行くわよ」

そう言うと、あたしは魔剣で結界を思いっきり斬りつけた！

## 眠り姫に会いに…(2)

「しっかし…あれだな。今にも崩れそうな感じだな」

「眠り姫の時間以外は止まっていないのね」

今あたしたちは、結界の破られた城の中を進んでいた。遠くから見ただけの中は老朽化が進んでおり、時々歩くたびにみしりと音が鳴るほどだ。城の中は暗く、光も届かないため、ハルが己の手の中に作り出した魔法の火を頼りに上を目指している。

「それにしても、300年も破られなかった結界がこうもあっさり」と。なんか、破り甲斐がないっていうか、面白くないっていうか「簡単にいくのにこしたことはないでしょう！」

あたしが剣で結界に斬りつけた後。予想通りパリーンと透明の何かが砕けた音がして。それっきりだった。後は、今まで結界なんてありませんでしたよ〜といわんばかりに、あたりからは怪しげな魔法の気配は消え、先に進めることになったのだ。

「言っとくけど、お城に入るための結界は解いたけど、その元となつたこのお城の姫の魔法はまだなんだからね」

「そうそう！俺としては、その眠り姫の眠りを覚ますのが楽しみでここに来たといっても過言ではない！からね」

そう言うと、ハルはでれんとした表情になった。あたしはその顔を見ると、深いため息をつく。彼の女の子への欲望は、限りなく深く、重い。

「ちょっと。趣旨が違ってきてるんだけど。あたしたちの目的は、

お姫様を眠らせて、なおかつこの場所への結界を作り出した強力な魔法の正体を突き止めて、それを回収することでしょう!？」

「わかっているわかってるよ。でもその過程の中に、姫様の眠りの魔法を解く、って作業も入ってるだろ？」

確かに、姫の魔法を解かなければ回収もできない。が。

「古今東西中世から現世来世まで、美しく呪われた姫の眠りを解くのは助けに来た男の熱い口付けって話だ。さあ、今行くからね。待っててね、俺のかわいいお姫様」

彼を見る限り、絶対わかっていない。そう確信するあたし。

「るんらんらん　俺のお〜かわいいお姫様　らんたつたー、今〜会いにいきますう〜よお、ランラン」

のんきに、鼻歌歌いながら階段でスキップしていやがる。やっぱり分かってない。

「君のお〜、唇は僕のもの、さあ」

分かっていない。この緩みきつた締りのない顔、完全に今日の目的を履き違えてる。あんまりうつとおしいから、思わず階段から突き落とす。が、我慢我慢我…。

「w o w w o w いえ〜」

「だあーっ、うつとおしい!!!」

思わず、あたしはハルに回し蹴りをする。気付けばハルは、叫び声を残しながらはるか階段の彼方へと吸い込まれていった。途端にあ

たりは真っ暗になる。

：いやあ、我慢が数秒と持たなかった。そして自分でもまさか、あんなにきれいに蹴りがヒットするとも思わなかった。なんか骨が碎けるようないい音もしたし、さっきの落ちっぷりもなかなかのもんだったし、ハルの奴、大丈夫だろうか。

なあんて思っていると、誰かが上めがけてすさまじいスピードで駆け上がってくる気配がした。そして、ぜえぜえ言いながら、黒い塊があたしに詰め寄ってくる。

「お、お前、いきなし何するんだよっ！？なんかメリツとか言ってたし、すっげ痛かったぞ！苦勞して登ってきたのに一番下まで吹っ飛ばされるし」

ああこの声。やっぱりハルだ。

「やかましい！あんたが本来の目的を完全に忘れてふわふわしてるから、いらつとしてちょびつと強めに蹴っただけでしょう！？そんなぐらい、あんたなら平気でしょう？そんなことより、早く火つけなおしてよね。暗いから、あんまり足元がよく見えないじゃない」

「お前がいきなり落とすからだろうがっ！？」

「しょうがないじゃない！！気付けば体が先に動いてたんだから！

！！」

そう、あたしは悪くない。絶対に悪くない。いらつとさせるようなこの男が悪い。

するとハルはため息をつきながら、しぶしぶといった感じで火をつける。

「…つたく、なんで俺様がこんな目に…。」

どうやら今のやり取りに納得いっていないらしい。直接あたしに抗議するのが怖いのか、小さい声でぶつくさ言ってる。

「なんか言った!？」

「いいえ、なんにも言ってねえよ!!それより、さっさと進もうぜ。いい加減、この長い階段を抜け出したいしな」

あんたのせいで時間がかかってるんだよ!?!というツツコミをすると更に長くなりそうなので、あたしはもう何も言わない。ハルの作り出した光を頼りに、あたしたちは城の頂上を目指して進み始めたのだった。

### 眠り姫に会いに…(3)

どのくらい時間が経ったのだろう。なんかもう、永遠とも思える時間、果てしなく登り続けているような気がする。

「はあ、はあ、はあ。…ちょっと、どんだけ、昇らせる気、なのよ、この、階段は」

「…お、俺に、聞く、な、よ！」

かれこれ小一時間は足を動かし続けているような気がする。もうくたくただ。というか、この単調な脚を動かすっていう作業にも飽きてきた。正直なところ。それは我が相棒も一緒のようだ。

「やつべ、ちょ、ちょっと休もうぜ。いい加減、疲れたんだけど」

「そう、ね。休憩しましょうか」

ハルの提案に是も非もなく賛同し、あたしたちはその場に崩れ落ちるように腰を下ろす。

「あ、疲れたぜ」

最初の頃のハイテンションは、彼にはもうないようだ。そのままぐでーっと体を後ろに倒す。

「なんか、あれね。暗くて周りもよく見えないし、景色も変わらな  
いから余計に単調よね」

そう、あたしたちの唯一の頼りは、ハルの作りだす小さな灯だけなのだ。

「にしてもよ、一体どれだけ上にてっぺんがあるんだ？」

「確かに。でもお城の大きさも、外から見たらかなりのもんだったわよね？普通のものよりも巨大っていうか…」

「ああ。こんだけ昇っても先が見えないっていうことは、想像以上に大きなお城だってことだろうよ」

でも。それでも。

確かに足場は暗くて悪いし、先は見えない。これだけ昇っても辿り着かないぐらい、高いお城なのかもしれない。だけど小一時間昇っても終着点が見えないっていうのは…。何かが引つかかる。そんな、300メートルも400メートルもあるようには見えなかったんだけど。

「ああ、早く俺の愛しの眠り姫ちゃんに会いたかったっていうのによお。だがしかしっ！！焦らされれば焦らされた分だけ、会えた時の感動はまた一塩つてもんだよなあ。こっ、なんていうの？俺の気持ち盛り上がる、的な？」

体をくねくねさせながら、上気した顔でうっとりあらぬ方向に視線をやるハル。はっきり言って気持ち悪いが、あたしはあえて無視する。そんな気色悪いハルのことよりも。なんかこっ、もう少して頭がすつきりするようない…。

ここは、例のものが封印されているであろうお城だ。それは、結界の強さが物語っている。城には入れないようにしっかりと強力な封印が施されてあった入り口。でも果たして、それだけなんだろうか、お城の封印は。たったそれだけ…？封印はまだあるんじゃないのか？昇り続けても終わりの見えない階段。階段。

と。あたしの頭の中に、ある一つの可能性がよぎった。

もしかして……………。

あたしはその場に立ちあがると、ゆっくりと剣を抜く。

「そう、そして目覚めた姫と俺は、300年という永き時を経てこの世で出会えた奇跡に感謝しながら、もう一度、今度はさつきよりも熱い、長い口付けを……………って、をい！！なんていきなり剣抜いてんの！？ちよつと待て、ちよつと待てって！！！！！！」

もしそうなら、これで長い階段の謎は解けるはず！

「待て、待て、落ち着け！？悪かった！！俺の妄想がヒートアップしすぎて、お前の癪に障ったのなら謝るから！！許してくれ…って聞けよ人の話を！？頼むからおい！！ギャ　、やめてくれ！！剣は当たると痛いんだからな！！振り下ろすなああああ！！！！！！」

あたしは思い切り、その場で剣を振り下ろした。

「死ぬ、死ぬ、まじで今度こそ本当に死ぬううう……………、って、あれ？俺、生きてる。しかもどこも痛くない」

ハルが慌てて自分の体に傷がないか確認する。傷がないのは当たり前だ。別にあたしは、うつとおしいハルを切り刻むために剣を抜いた訳じゃない（本当に切り刻んでやってもいぐらいうつとおしかつたけど）。ただ、この空間に剣で切りつけただけ。何もない空間を切っただけだ。

「やっぱり、思った通りね」

「ふう、冷や汗かいたぜ。おい、いきなり何してんだよ……」

ハルのあたしへの声が、途中でとまる。どうやらこいつも気が付いたみたいだ。あたしが何をしたのか。なぜ剣を抜いたのか。そして、何を切ったのかを。

「…なるほど、そういうことかよ」

ただの何も無い暗闇を切ったはずだった。でも、そこには確かに、何か手応えがあったのだ。そう、あの時、結界を切ったときのように。

なんてことはない。城の外に結界があったように、城の中にも結界が施されていたのだ。眠り姫のところへ辿り着かせないための、見えない結界が。その証拠に、周りの景色が変わった。

さっきまで一筋の光も届かない暗闇だったのに、ほのかに、突然出現した窓から光が差し込んできていた。おかげで、先の道がよく見える。階段の終着点は、目と鼻の先にあった。

「つまり俺たちは、例のやつが作りだした暗闇のなか、同じ階段を永遠と足踏みしていた訳か」

「そういうこと。…にしたって、ハル。あんた優秀な魔法使いなんでしょう？この魔法に気付かなかったの？」

そう、こいつがさつさとこの魔法に気づいていれば、永遠と階段を上り続けるという体力も精神力も時間も存分に消費することはなかった。するとハルは悪びれた様子もなく、しれっと、

「さつきと違って、ここはもうやつこのテリトリー内。つまり、こちら一帯に強力な魔法の気配がしている。そんななかでこの結果を見つげ出すのは無理な話さ。いくら俺が世界で右に並ぶ者がいないほどの史上最強の魔法使いでもな」

「はいはい。つまり役立たずってことね」

「おい、それは聞き捨てならないぞ!？」

「実際、あたしが気付いたからこの状況が打破できたんでしょが。

あんたが一体何してくれたっていうのよ」

「さあ、ゴールは見えた!! いざ行こうではないか!! 姫の待つ部屋へ!!」

あ、話、すり替えやがった。

「ま、いつか」

とにかく、例のぶつが（ハル流に言う）と姫が待つ部屋）あるのはすぐそこだ。あたしたちは残り短い階段を一気に駆け上がった。

## 眠り姫に会いに…(4)

姫のいる部屋がいる場所はすぐに分かった。なんてったって、階段の先にあつたのは、大きな扉のある部屋が一つだけ。ここに目的のものがあるのは、すぐに分かる。

「さあ、行くぞ」

緊張した面持ちで、今にも朽ち果てそうな扉のノブに触れるハル。ゆっくりとノブを回し、前の方へ押すと、ギーツという軋んだ音を立てながら扉が開いてゆく。どうやらここにはもう、何の魔法もかかっていないみたいだ。

扉を開けきり、慎重に中へ入ると、まず目についたのが大きなベッド。

曇った窓ガラスから降り注ぐ濁った光が、ふりふりピンクの天蓋のついた、いかにも『お姫様』っぽい、大きな可愛らしいベッドを映し出している。

そしてもう一つ。そのベッドの横の小さな丸テーブルの上に置かれた、まあるい水晶の玉。

手のひらサイズのその水晶の中心部では、深い緑色の光が禍々しいオーラを放ちながらちかちか光っているのが、遠目からでも分かった。

あのおどろおどろしさ。間違いない。あたしたちの探し求めていた、例のやつだ。

「やっぱり、あれが関係してたのね。ビンゴ…って、人の話を聞け

え　　っ！！！！」

あたしは刺していた剣を鞘ごと、思いつきりハルの方へ投げる。そいつは綺麗な弧を空中で描くと、ごい〜んという音を立ててハルの頭にクリーンヒットした。

「ぶぎゃっ!？」

そのまま崩れ落ちるハル。え、なんでいきなり凶器を投げたのかわつて? そんなもん決まってる。人の話も聞かず、あたしたちがここに来たそもその目的も忘れ、下心満々の顔で姫の眠ると思しきベッドに一目散だったからだ。全く、本当に予想通りの動きをしてくれるやつだ。

「…いたい」

「当たり前でしょう? 頭めがけて思いつきり投げつけてやったんだから」

涙目になりながら、床にひれ伏す馬鹿男。あたしはそんなハルの体を全体重をかけて踏みつけながら、水晶の下へ向かう。この世のものとは思えない悲惨なうめき声が聞こえてきたけど、気にしないことにする。

近くでみると、その禍々しさがよく分かる。この世のものとは思えない、いや、この世に存在してほしくない狂気の魔力を秘めた、恐ろしい水晶だ。これなら、今まで人の手では破れないほどの強力な結界や魔法を作り出せても不思議じゃない。

「…この力は人の手には余るほど、強力で残忍なもの。悪いけど、ここで消えてもらおうわ」

そう言うと、あたしは足元に落ちた剣をとると、二度、鞘から引き抜く。そして、水晶の上に構える。

「この魔剣に、封印させてもらおう」

剣にはめ込まれた緑の宝玉が、ひと際怪しい光を放つ。

「さあ、ご飯の時間よ魔剣ちゃん。思う存分に喰らいなさい!!」

そしてあたしは思いつきり水晶の上に振り下ろした。途端に、部屋はまばゆい緑色の光に包まれる。水晶にあつた光と同じ色。あまりの光の強さに、思わず目を閉じる。でもそれは一瞬のことだった。光は、まるで剣の宝玉に呑みこまれるかのように吸い込まれていき、そして。

消えた。

「……………ふう」

後に残ったのは、ぱっくりと二つに割れた水晶。そこにはもう、なんの光も映していない。代わりに、あたしのもった魔剣が、その水晶の光を受け継いだかのように全体が揺らめくように光り、…やがてその光も消えた。

「封印完了!!」

あたしはそう言うと、剣を元の鞘に収めた。これであたしがここに来た目的は果たせた。あ、疲れた。

「…おい、今ので例の力封印したんだよなあ」

いままで床に転がっていたハルが、そのままの状態です。声を上げると、つていうか、まだ起き上がってなかったんだ。ちよつと強く踏みすきたかな。

「まあ、ね。これでもうこの封印は全て解かれたはずよ」

「と、いうことはだ。もしかして、俺の愛するお姫様の封印も…」

「当然、解かれたでしょうね。じきに目を覚ますはずよ」

そう、力がなくなったということは、眠り姫の封印も当然なくなつたはず。すると急にハルはがばつと勢いよく立ちあがった。そしてすごい剣幕であたしに詰め寄る。

「なん、なん、なんつでだよ！？俺まだ、麗しい眠り姫の封印を口付けで解いてあげてないのん、なに勝手にさきさき進めちゃうわけ！？俺の楽しみを奪って、そんなに楽しいかよ！？」

…案の定、ここに来た真の目的を忘れてやんの。ま、そんなことだろうとは初めっから思っていたんだけど。

「いいじゃない。あんたの毒牙にお姫様がかからなくなつて」

「恋が！！それもとびつきり素敵なロマンチックな恋が生まれたかもしれないんだぞ！？自分をキスで目覚めさせてくれた運命の相手との出会い…。それをお前は。お前はあああ（泣）」

「…そんなこと言ってる間に、そろそろお姫様が目を覚ます頃だと思っただけ」

「くっ…。せめて、姫様が最初に目覚めたときに、俺が一番に視界に入るようにするぞ！…っていうか、もうこの際何でもいい！！俺が愛の口付けで目を覚まさせたことにしてやるっ！！！！」

そうしてハルはくるりと向きを変えると、一目散に姫の眠ると思しきベッドに向かう。愛らしい薄手のレースの天蓋をかき分けると、ちらりと、綺麗な白い腕が見えた。どうやら呪いは解けたらしく、その腕がもそもそと動いている。ハルは急いでその腕をとると、恭しく、白魚のような手に口付けをする。

「姫、お目覚めですか？姫は永い間眠っておられました。それこそ永遠に匹敵する時間を。しかし、もう大丈夫です。この私が姫の悪夢を取り除いてさし上げました。そう、愛の口付けという方法で。さあ、私と一緒に、永遠の愛を……………」

？

急にハルが言葉を失う。その手を取ったまま、かちんこちに固まっている。ここからは固まったハルと白い手しか見えないのでよく状況が分からないんだけど…。ただどうしたらハルは、相手の顔を見て固まったらしい。

どうしたんだろう。もしかして、想像以上に姫様が美しすぎて言葉が出ない、とか？はたまたその逆で、ものすごく、その、美しくなかつたとか？

不審に思ったあたしは、天蓋をかき分け、後ろからそつと近づく。

「ねえ、ハル、一体どうしちゃったの？あんなに会いたがってたお姫様なのに……………」

思わず、あたしもハル同様、言葉を失う。そこから見えたお姫様の顔。

真つ白な美しい腕の先にあつたのは、想像通り、その手を持つにふさわしい美しい人だった。ふんわりとした金髪の美しい髪。深い海を思わせる、黎明な青い瞳。見る者を魅了する愛らしい、薔薇色のほっぺ。思わず口づけたくなるつやつやした美しい形の唇。まさに、伝説になるほどに美しい、完璧なそのお姿。

ただし、それは女性ではなく男性。彼女、ではなく、彼。

つまり、ベッドに横たわっていたのは、美しいお姫様ではなく、世にも美しい王子様だったのであった。

## 目覚めた眠り姫

「まあ、300年前の食文化とは見違えるほど違ってるだろうから、口に合うかは分からないんだけど…。味は保証するわ」

あたしは、目の前のテーブルに所狭しと並べられたお皿を見ながら、彼に話しかける。そのお皿の上には、どれもおいしそうな料理が満タンに盛られている。

「どれなら口に合うか分からなかったから適当に頼んだんだけど。ちよつと頼みすぎたわね」

苦笑しながらそう言つと、

「い、いえ、そんな。僕のために気を遣っていただけで、本当にありがとうございます」

なんて言いながら深々と頭を下げた。

『彼』、とは、目の前に座っている金髪碧眼の彼。名前をウィリアム・ゴードン・スリユートン。あたしたちがさっきお城から拉致してきた、眠り姫こと眠り王子のことである。

目を覚まさせてあげたはいいものの、本人はここが300年後の世界だとはわかには信じられなかったようだ（普通はそうだ）、まあ他にもかくにも今の街を見せれば、300年前とは違う時代だつて分かつてもらえるんじゃないかということとで連れだしたのだ。で、ついでにおなかを満たすことも考えて、まっさきに街の食堂へとやってきたのだ。

「本当に、今まで僕のみたことのない料理ばかりで戸惑いますね。

こ、この、体に悪そうな真っ赤な液体？みたいなものは何ですか？」  
「ああそれ？それは『マーボ豆腐』って言って、東国から伝わってきたものよ。赤いのは、唐辛子っていう辛い香辛料が入っているからの。白いのはお豆腐。ピリ辛で、食べたすと癖になるよ」  
「は、はあ。…じゃあちよつと食べてみます！」

そう言うと、ウィリアムはおそろおそろ赤いお皿に手を伸ばす。そしてスプーンでひとすくいすると、口の前まで持ってくる。そのまま未知のものをじーっと眺めていたが、やがて意を決したように一気に口の中に流し込んだ。

「！？か、か、辛い…」

「あ、やっぱり辛いよね。それがこの料理の特徴でもありおいしいところなんだけど。やっぱり苦手かな？あ、もし辛かったら、吐きだしてくれてもいい…」

「いえ、大丈夫です。その、想像したことのない辛みだったのでびっくりしたんですが。でも、この味、僕はすごく好きですよ」

そして彼は、今度は嬉しそうに二口、三口と口の中へ入れていく。

「うん、おいしいですー！」

それで未知の料理への恐怖心が薄らいだのか、次々にお皿の上の料理に手を伸ばしていく。

なんにせよ、おいしいって言うってもらえる料理がってよかった。さて、それじゃああたしもたべようっと 正直、あのお城探検でかなりおなか減らしたんだよねえ。誰かさんが役立たずなせいで。あたしは一番にエビのチリソースに箸を伸ばす。うーん、海老がプリップリ この料理人、いい腕してるー！！

「あ、このしろいものは何ですか？」

「あー生き返る。…ん？あ、これは、肉まんっていうの。外がふわふわのおまんじゅうみたいなので、中に肉汁滴る豚肉が入っているの。え、その茶色いのはからあげ。鶏肉に衣をつけて油で揚げたもの」

「わああ、外はサククリで、中はジューシーですね。こんな初めでです」

「そうね。このへんにある料理は、全部東国から2000年ほど前に伝わってきたものだって言われてるから、ウィリアム王子の時代にはなくても不思議じゃないか」

「僕が食べたことあるものは、すくなくともこの食卓にはないです。へえ、こんなおいしいものがいっぱいあるんですね」

「そうそう。ほら、遠慮しないでいっぱい食べてね。二人じゃ食べきれないぐらいの量頼んじやったし」

「はあ。……あ、あの、さっきから気になっていたんですけど」

「ああ気にしなくていいからあんな馬鹿」

「そう言われても、その、えと……」

王子が口ごもりながら、気遣うような視線をあたしに…違う、あたしの後ろの壁に送る。

「ハルさんも、こっちに来て一緒に食べましょうよ…？」

心やさしい王子様は、あんなみの虫以下の変態最強勘違い男にも声をかけてくれる。心の広いお方だ。あんなことされて、盛大な勘違いをされて、笑って許してくれるなんて。あたしが王子の立場なら、ぐうの音も出ないほど殴り飛ばして、半殺し以上全殺し未満にしてやるのに。

そんな、広い器を持った王子様に、これ以上余計な気を遣わせるのは申し訳ないので、あたしは後ろを向くと、隅っこで遠い国に意識

を飛ばしている相棒を呼ぶ。

「ちょっとハル！いい加減こっちの世界に戻ってきてよね。うっとおしいんだけど」

眠り姫に口づけをすることを生きがいとして城まで行き、あたしにさっさと眠りの封印を解かれた上、男だという事実に気がつかないまま恭しくカッコつけてウイリアム王子の手に口付けをし、愛を囁いたお間抜けハル。奴はその事実に気付くと、あまりのショックに、なんか小さな声でぶつぶつ呟きながら、放心状態になってしまったのだ。

「俺の、美しき眠り姫との感動的なシーン…。男、男、男。俺は男を口説こうとしていたのか…？愚かな」

…いつものハルもうっとおしいけど、今のハルはそれに7重の輪をかけて更にうっとおしく、いらっとする。だからあえて視界にはいれないようにしていたんだけど、いつまでもあんな不抜けた状態じゃこれから困る。あたしはしぶしぶ席を立つと、ハルに詰め寄る。

「もう、終わったことをくよくよしたって、仕方ないでしょう!?! ウイリアム王子は笑って許してくれたし、それでいいじゃない」

するとハルはどんよりとした表情で、

「もう、俺の人生おしまいだ…。眠り姫との愛だけを頼りにここまで生をつないできたっていうのに、その望みが断たれた今、俺には生きていく意味なんて一ミクロンもない…!」

イラッ!!

もう、我慢の限界だ……。言っとくけど、あたしのハルへのイラツとする沸点はかなり低い（だからその度に日常的に殴ったり蹴ったり刻んだりしてるんだけど）。そんなあたしだけど、今回のことは勘違いに少しはかわいそうだな、と思って（自業自得だけど）、何も攻撃せず、何も言わず、街まで連れてきて、ご飯まで用意してやったのだ。

なのに、このあほんだらときたら……！！

じゃあいつそお望み通り、1ミクロンに刻んでやろうか……そう思っ  
て、あたしはゆっくりと剣に手をかける。

と。

「お、ミーナちゃん、今日も可愛いね」

「やだ、ジュークさんったら、いつも口が上手なんだから」

このお店のウェイトレスの女性が、奥から出てきてカウンターのお客様と会話をしているのが聞こえた。別に意識した訳じゃないけど、妙に甲高い声だから耳についたのだ。こっ、なんか、きゃぴつとしたような、甘えたようなような、女の子の子した声。さっきまではいなかったから、多分ずっと今まで裏にいたんだろう。まあウェイトレスは今はどうでもいいや。それよりこの屍のようなハルをなんとかしないとって、あれ!?

さっきまで胸ぐらをつかんでいたはずのハルが、消えていた。

「あれ？あいつどこ行ったの？」

あわてて周りを見渡す。するとウィリアムが遠慮がちな声でカウ  
ターを指さしてきた。

「あ、あのお、ハルさんだったら、あそこに…」

そこにいたのは、例のきゃぴつとした声にふさわしい、きゃぴつと  
した可愛らしいウエイトレスさんと、その足元に跪く、ハル。彼は  
潤んだ瞳で彼女を見つめると、情熱的な口調で彼女に愛を囁きかけ  
る。

「君のその声が、俺をこの世に引き止めてくれた。俺は、今この瞬  
間に、君と出会うために生まれてきたんだと確信したよ」

「まあ！…！」

ハルの真剣な愛の告白に、思わず赤面してほほ笑む彼女。あらら、  
目がハートマークになってやんの。

「っていつか、さっきまでの死にかけはどこ行った…」

今にもこの世から消えてしまいそうなほど、意気消沈していたのに、  
可愛い女の子を見つけた途端、これだ。いつものハル。

あまりの馬鹿馬鹿しさに、あたしは怒る気にもなれず、深いため息  
をつきながら席に戻った。

「ま、さっきみたいに暗くてうつとおしいオーラを出されているよ  
りは、100倍ましか」

「それにしても、ハルさん、すごかったですよ。あそこからウエイ  
トレスさんがいたところまで15メートルはあるのに、一瞬で瞬間  
移動していました…」

驚きの表情で、ウィリアムがハルを見つめる。

あたしは食べかけだったちゃんじゃおろーすに手をかけると、しみじみと呟いた。

「あいつの女好きは、天性のものだからね。瞬間移動なんて訳ないわ…」

それにしても懲りない男である。もうあいつのことは放っておこう。心底思う。

「王子も。あんな奴だから、気にしないで。もう放っておきましょう」

「はあ、そう、ですね」

「そうそう、心配するのがあほらしくなるわよ」

と、いう訳で、あたしたちはそれからハルのことは一切話題に出さず、2人、和やかに食事を続けていた。するとしばらくして、上機嫌なハルがスキップしながらこっちにやってきた。

「いやあ、あの子、キャスリンちゃん、っていうんだけどさ。めっちゃ可愛いよなあ。ここで働き始めてまだ1カ月らしいんだけど、そのういういしさもたまないよなあ」

そして、何食わぬ顔で席に着く。

「まだ少女のようなあどけなさをのこしつつ、大人への階段を上る途中の彼女がさなぎから蝶になるお手伝いを俺がぶぎゅつきがあああっ！！！！！！」

話の途中で、突然ハルが椅子ごとあらぬ方向へ吹っ飛んでいく。な

んか椅子と人間の頭が固い壁にめり込んだような音が聞こえてきたけど、まあ気にしない。もくもくと、あたしは料理を消費していく。するとハルがすごい剣幕であたしに詰め寄ってくる。

「つてをい！？いきなり何すんだよてめえ！？」

「え、何が」

「何が、じゃねえだろうが！！人の座つてた椅子ごと足で蹴り飛ばしやがって。おかげで痛い目見たじゃないか」

「いや、なんかしれつと席についてご飯食べるあんたにむかつときて」

まあでも、いまのでちょっとすつきりしたかも。あたしはハルの頭にできた巨大なこぶを見つめながらそう思う。ふふ、いいざまだ。二枚目も台無し。

「…ま、いいさもう。いつものことだしな」

あたしに抗議しても無駄だと悟ったのか、ハルは吹っ飛ばされた椅子をもう一度元の場所に戻すと、よっこらせと座った。

「え、今のつて、よくあることなんですか！？」

今まで静かにあたしたちを見ていたウィリアムが、驚愕の表情を浮かべながら言葉を並べる。

「ああ、よくあることだ。俺のやることなすこと気に食わないのか、毎日何回も俺に攻撃してくるんだよ、この暴力女は」

「ちよつと！！あたしが一方的に悪い、みたいな言い方やめてよね  
！」

「いいや、お前が悪い！！大体俺が、お前に直接迷惑かけたことあ

「つたかよ!？」

「よくそんなことが言えるわね。大体あなたの尻拭いしてんの、あたしでしようが!？」

「…って、ちょい待ち。今はそんなことおいとこうじゃないのよ」

「うっかりいつもの感じでハルと言い争いになるところだった。そもそも、あたしたちがこの街に来た目的は、だ。」

強力な封印を作りだした魔法の力を回収し、ついでにその力によって眠らされた、300年前のお姫様を救出することだった。そして今、その目的は果たされたのだ。まあ眠っていたのがお姫様じゃあなくて王子様だったっていう違いはあるにしろ、果たされたからいい。そしてその肝心の王子様は、あたしたちの目の前に座っている。そして物珍しそうに鳥のからあげを噛みしめていた。

「で。こうして大馬鹿野郎のハルもこの世に復活したことだし、そろそろ本題といこうじゃない。…この世界があなたの生きていた世界の300年後のものだっっていう実感は出来たかしら？」

そう、この飯屋に来たのは、あたしたちの空腹を満たすためっていうのと、目覚めたばかりの王子様に、とりあえず、現状を知ってもらいためだった。だからわざわざ、彼の生きていた時代にはなかったと思われる、料理をそろえた専門店にまで足を運んだのだ。すると王子は箸を止め、何かを噛みしめるようにゆっくりと、言葉を紡いだ。

「そう、ですね。少なくとも、街の雰囲気や料理の感じを見た限りでは、僕の生きていた時代とはかなり違うというのは分かります。とはいえ、まだ実感はそんなにわかないんですが」

「あら、ずいぶんすんなり受け入れるのね」

普通、目覚めたばかりの時に、今はあなたの生きていた時代から300年経った世界です、とか言われたらなかなか納得できないし、理解するのに時間がかかるもんだと思うけど、彼は思ったよりも早く理解したらしい。

「これだけ今までとは違ったものを見せられたら、さすがにそれを否定できませんよ。実際、僕の眠っていたお城は記憶にあったものよりも古びて、今にも朽ち果てそうになっていましたから」

そう言うと、複雑そうな顔で苦笑する。

「心のどこかでは信じたくないと思っではいますが……。こればかりは仕方がないですね」

「……なあ、話の腰を折るようで悪いんだけどよ」

口を挟んだのは、ハル。一人、今の状況を理解できていないような？マークいっぱい顔で、ウィリアムの方をまじまじと見つめている。

「今気付いたんだけど、こいつつてもしかして、さっきの眠り王子？」

……傍にいたはずの男が今更、何を寝ぼけたこと言ってたんだ。と、いうことなかれ。なんせこの男、さっきのさっきまで、頭の回線がショートした廃人だったのだ。つまり、あたしたちの会話とかなんやらそういうもん、全然聞いてなかった訳で。

「……ま、あの状態のあんただったら仕方ないか。いいハル、よく聞いて。彼の名はウィリアム・ゼボン・スリユートン。この地を治

めていた、スリユートン家の血をひく、れっきとした王子様よ」

「あ、改めて、どうもです。ウィリアムです。先ほどの目覚めの時はどうも」

ウィリアムはあわてて、ハルにぺこりとお辞儀をする。先ほど、とは、言うまでもない。ハルが彼を女と勘違いして（以下略）のあれだ。するとハルはバツの悪そうな顔で頭をかくと、

「あ、その、なんだ。さっきのは忘れてくれ。できればあの勘違いのくだりは墓場まで持っていきたいぐらいだから」

まあ、そうだろうなあ。恥ずかしいもほどがあるもんね。

「とにかく話を進めるわよ」

ハルの個人的な恥ずべき過去はおいといて。あたしは話し続ける。

「それでウィリアム王子、目覚めたのはいいんだけど、この世界が彼の生きていた時代から300年後の世界だつてということが納得できないって言ったの」

そう、あの時目覚めた王子は、まず、状況ができていなかったよう、で、手をとつたまま石化した見知らぬハルとあたしの姿を見て、びっくりしていた。とりあえずあたしは、固まっただまんだつたハルの体を王子様から無理やり引き離すと、今の状況を細かく説明した。

「でも、目が覚めていきなり、『あなたは300年間眠り続けていたんですよ』って言われても、普通は納得できないでしょ？ 実際ウィリアムもそうだった」

あたしの話はきちんと聞いてくれた。でもやっぱり信じられないといった様子で困惑していた。

「なににせよ、お城の中で話しても始まらないし、実際に外に出て、街の感じとかが彼の生きていた時代とは違っていることを知ってもらおうと思つて。それでここまで連れてきたの。ついでに腹ごしらえも兼ねて、ね」

とはいえ、彼の目覚めたそのままの姿で街には行けなかった。なぜかは詳しくまだ聞いてないから分かんないけど、彼は今まで寝ていたベッドとよく似た、可愛らしいふりふりのドレスを着ていたのだ。しかも今の時代の服の作りではない。それこそ、おとぎ話に出てくるような古いドレス。

「勝手ながらあなたの服を漁って着せたの。さすがにあたしの服を貸すわけにもいかないし」

ドレスを着て眠っていた彼だったけど、そのことを指摘した時の慌てぶりとかから見て、そういう趣味があつて好んで着ていた訳じゃあなかったみたいだった。ので、男物のこいつの服を拝借したのだ。

「なるほど。どうりで見覚えのある服なわけだ。俺の服だったんだな」

「そういうこと。…で？今までの感想とか、そろそろ聞きたいんだけど」

あたしは、今まで静かにあたしたちの話聞いていたウィリアムに話をふる。

「そうですね…」

彼はどこか困つたような表情を浮かべながら、それでもどこか納得

した感じで答えた。

「ここまで自分の知らないものであふれる世界を見せつけられて、信じないわけにはいかないですね。それに、まるで廃墟のようなお城を見た瞬間、薄々納得していたんです。ああ、僕は確かに300年も長い間、ここで眠っていたんだなって」

「そうよ、あなたは300年もの間、眠り続けていた。そしてその間にあなたのこの話は伝承となり、人々によって風の噂となって世界中に広まったわ。悲劇のおとぎ話『眠り姫』としてね」

「あ、そうそう、それだよ!!!」

突然ハルが立ち上がる。あまりの勢いのよさに、座っていた椅子がごとんと床に転がる。

「ちょっと、なにいきなり興奮してんのよ……」

「いやだつてさ、俺たちは『眠り姫』の伝説を聞いて、この街にやってきた。なのに、実際にそこにいたのは、お姫様が眠っていわゆる少女趣味のベッドの上に横たわる、ドレスを着た男、お前だっただろ？なんでそんなことになるんだよ。っていつかそもそもお前は、なんでそんな恰好して寝てたんだ？」

確かに。あたしも王子様の衣装を見たときは思わず、しかも大きな声でぎゃあつ、とか言ってしまったんだけど。なんせ顔が中世的で可愛らしいから、女の子と間違えてもおかしくないし、そんな可愛い顔だから、女物もよく似合う。色も白いし、華奢な感じ。なんせあのハルが男だつて気付かなかつたくらいだ。そういう趣味に走ったとしてもおかしくない。

するとウィリアムははにかむように

「はあ、それはもちろん、僕にそういう趣味があった、という訳ではありませんよ？アイリーンさんにもさんざん突っ込まれましたが」「あはは、ごめんごめん。あまりに違和感がなかったから、ついからかつちゃった」

別に気にしてませんよ。ウィリアムはあたしにそんなニュアンスで笑いかける。その顔があまりに綺麗だったから、思わず顔を赤らめる。

…その笑顔は不意打ちだと思う。

いきなり顔を赤くしたあたしに、ウィリアムは不思議そうな眼をしたが、あたしは構わず先を話すよう促す。

そして彼は、今までのことをとつとつと語り始めた。

## 封印された訳

「僕は、この国を治めていたスリユートン家の長男。第一王子という立場でした。そして僕には5つ下の妹がいました。すごく愛らしくて、性格もよく、みんなから愛されて育ちました」

そう言ったウィリアムの顔は、何かを慈しむような柔らかい微笑みを浮かべていた。

…きつと、本当に可愛がっていたんだなあ、その妹のこと。それが傍目から見ても容易に想像できる。でも彼はそこでふっと顔色を曇らせた。

「ですが…。あれは、妹が14になった時のことです。大嵐がやってきたある日、一人の物乞いの男が、城にやってきたんです。全身黒づくめでフードを頭からかぶっていて、物乞いにしたって見るからに怪しいそぶりでした。でもそんな天気の中追い出すわけにもいかず、物を恵んだだけではなくお城での滞在を許しました。しかし……その男が、ジユリーと結婚したい、と言ってきました。妹とも顔見知りでもなかったし、当然、城の者は全員反対で。こんなによくしてやったのに、なんて無礼な奴だ！！って父様もお怒りになって、嵐もやまない中、すぐに男をお城から追い出したんですけど…。その時にその男、『絶対に姫を奪いにやってくる』って言うていたんです。もちろん、追い出された腹いせにそんなことを言ったとみんなは思ってたんですが、言葉に妙な迫力があったので、その男の素性を、父が調べさせました。するととんでもないことが分かったんです」

「今から300年前…、全身黒づくめ、このあたりをうろついていた物乞いのような男、か。その男、もしかして『暗黒の魔導師』じゃないのか？」

ぶつぶつ呟いていたハルがウィリアムにそう言うと、彼は眼を見開いて

「はい、その通りです！彼は山の中に一人で住んで、ひたすら魔法の研究に明け暮れていた魔導師です。その力は強大で全てを闇の力で呑みこむ術を得意としていたことからそんな二つ名がつけられたらしいです。それにしても、なんで分かったんですか？」

するとハルはなんてことない顔で

「強力な魔法を使える腕の持ち主。しかもあの城にかけられていた封印は、なんか暗そうな陰湿そうな感じがしたからな。だから、そんな魔法を使いそうな腕の立つ奴で、300年前に生きていた暗い感じの魔法使いなんて、そいつしか思い当らなかったんだよ」

「へえ、魔法にも、その人の特徴？癖？みたいなもんがあるのね」

あたしは魔法が全く使えないからよく分かんないんだけど、どうやらそんなのがあるらしい。

「で、その…『陰湿で根暗な魔術師』、だっけ？彼が一体何をしてくしたの？」

若干二つ名が変わった気がするけど、あんまり気にしないことにする。ウィリアムはこくんとうなづくと、続きを話してくれる。

「はい。その男が、強力な魔法を使う魔術師であると分かった以上、絶対に彼は妹を連れ去りに来る。そう僕たちは確信しました。だから、魔術師が来たら撃退しようと考えたんです。…もともとスチュリアート家は魔法に非常に秀でた家柄で、特に僕は一族の中でも飛

びぬけて魔法力が高かったんです。だから、彼が妹をさらに城に  
来た時に、僕が妹の身代わりとなって彼と戦い、撃退することにな  
りました。それで僕は妹の部屋で、妹の着ていた服を着てあそこで  
眠っていたんです。」

「だから内装も服装も女の子使用だったのね。妹の身代わりとなる  
ために」

「ええ。ですがいくら僕の魔法力が高くても、魔術師には敵いませ  
ん。だから、魔法を助けてくれるっていう水晶を使うことにしたん  
です。これがあれば、魔術師と互角に戦えると思って」

水晶、あの部屋にあった、禍々しい力を帯びたやつだ。そうか、も  
ともあの水晶は、ウィリアムが使うつもりであったという訳か。

「そしてあの日。新月の夜、魔術師が僕のところへやってきました。  
予定通り、妹をさらいだすために。眠っているふりをした僕に近づ  
いて、彼は僕をさらおうとしました。そのタイミングで僕は魔法を  
発動したんですけど…。術が発動する前にばれてしまって。おまけ  
に水晶も取り上げられてしまって。自分をだまそうとしたことに腹  
を立てた魔術師は、その腹いせに水晶の力を使って僕を殺そうとし  
ました。…っていうところで僕の記憶は終わっています。そして気  
が付いたら目の前にあなたたちが立っていた、という次第です」

なんにも状況が分からないでこの話を聞いていたら、何が起きたの  
かさっぱりだったと思う。でもあたしとハルには、ウィリアムの話  
した情報だけで、その時に何が起こったのか、十分察しがついた。

あたしたちはお互いに顔を見合わせる。ハルも同じように合点がい  
つたみたいだ。

「ウィリアム。お前が寝ていた時、何が起こったのか詳しく説明し

「やるぜ」

ハルはそう言うと、首をかしげるウィリアムを見る。

「あの水晶を使って、魔術師はお前を殺そうとした。だがその水晶の力を全力で、全て発動した途端、水晶の魔力の大きさに耐え切れず、魔法が暴発した。そのせいで魔術師の体はぶっ飛んでそのまま死んだ。そして『ウィリアムを殺す』という魔法式は暴発によって書き換えられ、『永遠の眠りにつかせる』ってもんになったんだろう。城の者はその騒ぎの間に逃げるかなんかしたんだろう。現に生き残った王たちは、別の場所に城を建て、生きながらえているからな。んで、強すぎる魔法は城全体を覆い、あの空間の中に城を全部飲みこんじまった。ウィリアム、眠ってるお前ごとな」

「その後、なんとかウィリアムを救い出そうと、王様たちは色々な魔法使いに封印を解くようお願いするけど、あまりの強力さに誰も手出しがでなかつた。やがてそれが風の噂となって世界中を駆け回って、いつの間にか『美しいお姫様が封印されたお城』っていう伝説として現代まで残っていた…そういうことね」

ハルの後を、あたしが引き継いで言葉にする。まあ人の口から口に伝わるものだから、どこか途中で『王子』が『姫』におきかえられてもなんら不思議じゃない。

「ま、お前が寝ている間に起こったことは、推測するにこんなもんだと思うが…」

そう言って、ハルは気遣うようにウィリアムを見る。すると彼は思いのほか、穏やかな表情で微笑んでいるではないか！もしかして、あまりの事実拒絶反応を示したのではないか。その証拠に、彼は

なにやら遠い目をしている……。思わず2人してまじまじと彼を見ていると、ウィリアムはその視線に気がついたのか、慌てて言葉を紡ぎ出した。

「あ、その、確かに信じがたいですし、こつ、どこから手をつけていいのか分からなくなるくらい頭は混乱しているんですが。ただ、ただ、ですね……。少なくとも、僕の家族たちや城のみんなは無事にあそこから逃げさせたんだと思うと、なんだかほっとしてしまつて……」

そう言ったウィリアムの声は、本当によかったという安堵の色がにじみ出ていた。

「もしかしたらあの魔法に巻き込まれて、僕のようにずっと眠り続けてしまったんじゃないか、とか、考えてたんですけど、そうじゃなくて本当によかった」

「……あなたの家族はあの後も、立派に王族としての務めを果たしたわ。その証拠に、今この地を治めているのは正真正銘、スリュートン家の人間だから」

そう告げると、ウィリアムは、心から嬉しそうな笑みを向けた。

「そうですか……。それは僕も嬉しい限りです。じゃあ今お城にいるには、僕の子孫たち、つていうことなんですね？」

「そうなるわね。確か、スリュートンの直系が代々後を継いでるから、あなたのひひひひひまごぐらいじゃない？」

300年で、平均30年の在任と考えると、そんなもんなんじゃないのかな。まあ、そのへんの『ひ』の数は適当にするとして、大事なのは彼と直接血が繋がっている、という事実なのだから。

「んで、だ。目覚まして色々状況を呑みこんでくれたところなんだが。お前これからどうしたいか？」

食後の兼脂肪分解のためのウーロン茶をすすっていた相棒が、ウィリアムにそう質問を投げかける。あたしも手の止まっていた杏仁豆腐を口に運びながら、ハルの質問に上乘せする。

「そうそう。仮にもあたしたちがあなたの300年の眠りを覚ました張本人だし？いくらなんでも覚ますだけ覚まさせておいてはいサヨナラ〜って訳にもいかないでしょ。いきなり見知らぬ世界に放りだしたりはしないわよ」

時と場合によつたらそれも考えてたんだけど。例えば相手が超タカビーリーなお姫様だったり、死ぬほど面倒くさそうな相手だった場合は、適当にその辺の役人に押しつけようと考えてたんだけど。このウィリアムは本当に素直なよき王子様なので、そんな非人道的なことはしない。こうなりゃあ、彼が今後どうするか決まるまで、責任持ってついていようじゃないか！

ウィリアムは困惑した目つきで、目の前のオレンジ色をしたプリンをかじりながら

「そう、ですね…。僕の今後…」

本気で思索していた。

実際、もしあのまま300年前に生きていれば、彼は間違はなく王だった。でも今は彼が本来生きていない時代。しかも、後継者はいるから、今更王位にはつけないだろう。そうなると、何をしたらいい

いか分からないと思う。でも。逆に考えれば、ウィリアムには何の縛りもない訳だから、好きなことを何でもできるっていう自由がある。

あたしたちは彼が悩むのを横目に見ながら、テーブル上のデザートをむさぼる。そしてウィリアムがややあつて口を開いたのは、あたしたちがゴマ団子の奪い合いをしている時だった。

「アイリーンさん、ハルさん」

「ちょ…あんた何個食べれば気が済むの！？それで6個目……！！」  
「お前は俺の分の杏仁食べたんだからそのくらい多めに……」

神妙な面持ちでこつちを見たウィリアムに気付き、あたしたちは不毛な食い意地争いを中断する。ふたりしてきちんと彼に向き合つと、次の台詞を待った。

「……正直に言うと、僕はまだこの時代のこと、300年前のこと、自分のことも、まだきちんと消化できていません。信じられるし信じたいけど、思考がついていかない感じです。それに、これから右も左もわからない状態で何をしたいのかも、それすらもよく分かりません。あなたたちのことも、本当に信用していいのか、まだ迷っている部分もあります」

「……………」

「だけど、やっぱり僕はあなたたち二人を信じることにします。僕を長い眠りの封印から解放放ち、事実を伝え、今を教えてくれた、あなたたちを、僕は信じたい」

はっきりと言いきったウィリアムの瞳には、確かな輝きがあった。

あたしたちを信じる、その強い意志が、何も言わなくても伝わってくる。

嬉しくなって思わず顔がほころぶ。それは隣も同じだったみたいで、奴も嬉しそうに笑っていた。

「それで僕、これからなんです…。とりあえず、この国の王様に会ってみたいです。いいえ、実際に会えなくてもいい。一目見るだけでもいいんです。僕の子孫の姿を、この目に焼き付けたい、そう思います。ですが、お城にいきなり行って、『僕はあのお城の封印から解かれた王子です』って言っても、多分信じてくれないですよね…」

今度は一転して悲しげに目を潤ませる。まあ確かに。今日覚めました！！って言うっても、本当にそうだったっていう証拠はないし、そもそも噂の内容は『眠り姫』だ。それが実は王子で男なんです、って説明したところで、不届き者扱いされて追い返されるのが関の山だろう。

けれどハルは、ウィリアムの話の聞くと、途端ににたあくっという不気味な笑みを浮かべる。

「ふっふっふっふっ。それが、そうでもないんだなあこりゃあ」

そしてどこか自慢げに胸を張る。

「俺たちがいれば、王様に会うことくらいお茶の子さいさいだぜ、なあアイリーン？」

「どうでもいいけど、そのお茶の子さいさいって表現古くない？いまどき誰も使わないと思うんだけど」

「えっ！？嘘、マジで！？…ちなみにウィリアムは聞いたことあるか、お茶の子さいさいって」

「はあ、あるのはあるんですが…。僕の時も、長老の方が使つくりいで、滅多に日常では聞きませんでしたね」

…どうやらハルのぼきやぶらりは、300年よりも更に昔らしい。一体幾つだ、この男。見た目は20代半ばでも、中身は既に350歳くらいなんだろう。

つて、話を脱線させてしまった。今はそんな話じゃない。王様に会うための作戦だ。

「今の王様は、ロシアン様よね。ならツテがある。すぐにでも会わせてあげられると思う」

「本当ですか!?!」

ウィリアムが目を輝かせながらこつちに身を乗り出す。思ってもいなかった吉報に、居ても立っても居られないらしい。

「まあな。これくらい朝飯前だ」

だからなんでハルが威張る？

「ありがとうございます!?!」

ウィリアムは感謝してもしきれません、と呟くように言うと、深々と頭をさげようと…。その時だった。

大地が揺れた。いや、違う、正確には大きな轟音が聞こえてきて、あたかも地面が揺れているように感じられただけだ。

「!?!?なんだ、地震か?」

周りにいたお客さんたちが慌てたように立ちあがると、周りをきよるきよる見渡す。もちろんあたしたちも、だ。店内はしばらく騒然としたが、すぐに食堂に飛び込んできた一報にますますざわめきは大きくなることになる。

突然扉がドン！と大きな音を立てたかと思うと、一人の若者が血相を変えて叫んだのだ。

「大変だ！！眠り姫の城が崩壊した！！！！」

瞬間、人々が一齐に外に飛び出していった。あたしたちも人の波に埋もれながら、慌てて状況を確認しに走る。

外に出ると、通りにあふれんばかりの人ばかりができていた。そしてみんな、見ていたのは一方向。

そこには眠り姫のいる、と言われている森があった。そしてその緑の木々の間から、大量の白い煙が上がっていた。火事、っていう訳ではなさそうだ。炎は上がっていないし。

あれは多分、土砂と大量の埃だ。そしてその煙の震源地は間違いなく、例のお城、だ。みんながあまりの事態に状況を呑みこめず、あたりが喧騒に包まれる中、ハルが隣でぼそつと呟いた。

「……………もともと老朽化が進んでいた城だ。封印が解けて、時間が正常に進みだした以上、いつ崩壊しても遅くなかったからな」  
「なるほど」

確かに。あの建物は、ぼろぼろのぐつしゃんぐしゃんで、正直現存していたのが不思議なくらいだったからなあ。でも。

あたしは同じく横にいたウィリアムを見やると、顔に笑みを浮かべ

る。

「城が崩壊した理由は、あたしたちが眠り姫：ならぬ王子を救い出したから。こう説明すれば、向こうもあなたが300年間眠り続けた王子様、って納得しやすいと思うわ」

幸い彼は、ただの一般庶民には見えない。どことなく高貴なオーラを漂わせている。城から救い出した王子様、って言っても、信じてもらいやすいだろう。そうと決まれば、善は急げ！！だ。

あたしは城の方向を見つつ何気に女の子を物色していたハルに一発かますと、財布を渡した。

「あそこで一緒に野次馬になってる店主に、お会計してもらってき  
て」

## いざ行かん。お城まで

その場所から現在のお城までは、ごくわずかな移動距離だ。なんせ、大通りの突き当たりにはそびえたつ大きな建物がそうなんだから。そしてさっきの食堂はその大通り沿い。これで分からない方がおかしい。

「やっぱりあれがお城だったんですね」

ウィリアムがどこか感動したように、うっとりとして城を見つめながらそう言った。あたしはその姿に苦笑しながら

「さっきは目覚めたばかりだったし、いきなり『あれが王様のお城です』って言いづらかったから、説明しなかったのよね」

正直、彼の身の上からして、複雑な心境だろうから、と黙っていたんだけど、少なくとも巨大な建物を見つめるその瞳に、負の感情は見られない。むしろ、新しいおもちゃでも貰った子供のように、きらきらしている。

「300年の間に、建築様式もこんなに変わるものなんですね。僕の頃にはあんな絢爛な建物ではなかったです。それに、すごくきれいです」

スリユートン王国のお城は、世界でも有数の美しさを誇ると言われている。日の光を浴びた真っ白な建物は他に類を見ない美しさで、通称『白亜の城』と呼ばれている。

「夜になると、月明かりが城を淡い光で包みこむらしいが、それが

また幻想的で人々を魅了するんだと。ちゃんと月の動きまで計算してあそこに建てたらしいぜ……っと」

途中向こう側から来た人にぶつかりながら、ハルがそう言った。

それにしても……。人の数が半端じゃない。なんせ、この国で最も有名だった伝説のお城が崩れ去ったのだ。そりゃあみんな関心は高いだろう。何人かの、いや、何十人かの元気な老若男女さんたちが、森に向かっていくのも見かけたし。

ただ、さっきよりは幾分ましだ。すし詰め状態って訳じゃないし。煙をあげている光景にも見飽きたらしい多くの人たちは、既にいつも通りの生活を送っている。

城に近づくにつれ、徐々に人の数もまばらになっていく。見物をしたい人たちは、もっと

森の近くに行っているのだろう。進めば進むほど、あたりは静寂に包まれていく。

やがて人っ子ひとりいなくなり。金色に輝く、大きな装飾品が見えてきた。細くて長いその金の棒は、一本で一つの形を作り上げている。まあ、一言で言うなら、つまり門だ。でっかく空高く突き上げられた金の門が目前に現れた。その先には、真っ白い建物が、お城の姿も確認できた。

門の前に立つ門番は暇そうにしながら、その場にとっ立っていた。時折あくびも混じっている。あたしたちの姿が目に入ると、門番は途端に顔を引き締め、手にした対侵入者用の武器を握りしめた。

「すみません、ちょっと会いたい人がいるんですけど」

そう話しかけると、ますます門番は険しい顔つきになる。

「……失礼ですが、どなたでしょうか」

確かに、いきなり城の人に会わせろって言われたら、警戒するかもしない。ウィリアムが後ろでかすかに不安げな色を滲ませていたけど、あたしは気にせず続けた。

「私の名はアイリーン。セイルン様に会わせてもらいたくてここまで来ました」

「!?!?王女様、ですか?!?!」

明らかに驚いている。そう言いながら、門番は改めてあたしを上から下まで穴があくほど見つめる。

「王女様に、お姉さまに伝えてください。アイリーンが来たと」

その瞬間、門番たちは体をびくりと震わせた。

「アイリーン…サイレン国の第17王女様、ですか？」

あたしはこくりと頷く。そして半ば信用しきれていない彼らの手に、あたしは懐から出した小刀を渡した。

「ここにはサイレン国の紋章と守り神の竜が彫られているわ。これを王女様に見せてくれたら分かるはずだから」

すると門番の片方が、少々お待ちくださいと、門の奥へと引っ込んでいった。

程なくして、今度は別の人が現れた。さっきの人よりも一回り上の、黒服に身を包んだ老紳士だ。彼は恭しく頭を下げると、

「お待たせして申し訳ありません。王女様のところへ案内させていただきます」

鶴の一声、だった。あたしたちを阻んでいた巨大な黄金の門は、ゆつくりと、あたしたちを招き入れるために外側へと開いた。あたしはにっこり頷くと、後ろを振り返る。

「〜！さすがはアイリーン様」

ハルが口笛を吹きながら上機嫌でこちらを見やる。ただウィリアムだけは違った。いつぱい聞きたいことがある。でもどれから口にすればいいのかわからない、そんなニュアンスがありありと伝わってくる。結局彼が口にしたのは、一言だけだった。謎が顔に張り付いたまま目を見開くと、

「アイリーンさん、あなたは一体…本当に何者なんですか？」

絞り出すような声でそう尋ねる。だけどあたしは何も答えず、ただ静かに微笑んだだけだった。

## 姉との再会（1）

「アイリーン！！」

通された部屋に入ると、いきなり誰かがあたしにすさまじいスピードで走り寄って来た。あたしはその体を受け止めようとして…追突のスピードが速すぎたせいで受け止めきれず、2人して床に倒れた。

「姉様：相変わらずイノシシみたいな性格ですね」

猪突猛進なところはちつとも変ってない。あたしは苦笑しながら、上に乗っかってる人物を見た。

彼女があたしの姉であり、この国の王女でもある、セイルーン王女、その人である。

「

だつて！！あなたが会いにきてくれるなんて夢にも思わなくて。

つい嬉しくて！！」

そう言つて姉様は、昔と変わらない人懐っこい笑顔であたしにこつと笑いかけた。

今年で御歳27歳。いつまでも若々しくて少女のままだけど、これで一国の女王様で、3人の子持ちとはとてもじゃないけど見えない。セイルーン姉様は8年前、まだあたしが10歳だった頃にこの国に嫁いでいったんだけど、それまでお城であたしことをすごく可愛がってくれた、一番仲のいい姉様なのだ。時々里帰りすることはあつても、あたしの方から行くのは初めてなので、テンションが上がってしまったの。姉様はそう言つて立ち上がると、ついでに姉様の下敷きになつていたあたしも起こす。

「改めて、久しぶりねアイリーン。そしてようこそ、ガルダム王国へ」

「ええ、姉様、お久しぶり。元気そうだなによりです。当主のロシアン様はお元気ですか？」

「もちろん！今はちよつと外遊に行つてお城を留守にしているんだけど、しばらくしたら戻ってくると思うわ。明後日にはこちらに戻ってくるという文が来たから」

「そうなんですか。ロシアン様とはまだ仲良くやっていますか？」

王家同士の結婚なんて、10割方政略結婚だ。親の決められた相手のところに嫁ぐ。そこに愛なんてそうそう生まれない。だって結婚するまで相手の顔が分からないくらいだ。でも、聖蘭姉様とロシアン様は、政略結婚ながら稀にみる仲良し夫婦として有名だ。お互いに、会った瞬間びびつときたらしい。

あたしの質問に、姉様は顔を赤らめながら満面の笑みで答える。

「ええ、もちろん！！とつても仲良しよ。この前も2人で温泉に入りに行ってね。そこで一緒にお湯につかりながら、自然の景色をゆったりと堪能したわ」

そう言つて、うつとりとした表情であらぬ方を見つめる。幸せオーラ、満開だ。そんな、愛に満ちあふれる姉様に、あたしに言えることはただの一言だけ。

「あああ、ごちそうさまです」

そして軽く姉様に手を合わせた。何にせよ、仲良きことは美しき事かな、うん。

「そうそう、その時にね、ロシアン様に『君は10年経っても少女のようで愛らしいね』とか言ってもらってね。君を世界で一番愛しているよ、って言うてくれてね」

「ああ、なんかくさいセリフですね。でもロシアン様ぐらい男前な人に言われたら、なんか納得です。そういえば、ロシアン様って世界のイケメン王10人に選ばれてますよね」

「そう！そうなの！！だから、毎日のようにラブレターが届くのよね…。あたしという人がいるっていうのに。…でもでも、ロシアン様は、絶対に側室は作らないって。だから私、頑張ってたくさん子供を産むの！！実は今妊娠3カ月で…」

「え、そうなんですか！？それは姉様、おめでとunggございます」

「でね、そのことを伝えたらロシアン様ったら…」

「えええええ、ごっほん！！」

部屋の隅の方から、遠慮がちな、そのくせわざとらしい大きな咳ばらいがその時間こえてきた。あたしたちは会話をやめる。

「あ」

あたしたちが振り返るとそこにいたのは、所在なさそうに佇む旅の相棒と、目覚めたばかりの元眠り王子の姿が。

「……………完つつつつつ全に、忘れてた」

久しぶりに姉様と会えたのが嬉しくて、ついうっかり、2人のことを忘れていた。そうそう、今回ここに来た一番の目的は、アレだ。眠り姫ならぬ眠り王子のことだった。あたしはロシアン様の話をそこで終わらせると、今回来た目的を話すことにする。

「姉様。今日ここに来たのは、実はちょっとしたお話があったんです」

「あら、そうだったのね」

「そう、そうなんです。これは結構重要な話だと思っただけです……と。その前に彼らのこと、紹介しますね」

「彼ら……後ろの殿方たちね。あ、もしかして、父様からの手紙にあった、一緒に旅をしている方？」

姉様の顔がぱつと輝く。とある事情があつて、あたしが相棒と旅をしていることは、世界中に散らばっている姉様兄様方に、父様から手紙がいつているのだ。

「ええ、まあ。一人はとりあえずそうなんですけど……」

あたしは2人を呼ぶと、姉様の前で彼らの紹介をする。

「こっちの赤い髪の男が、例のあたしが今一緒に旅をしている相棒  
あたしは若干嫌そうにハルの手をやる。え、なんで嫌かって？それはアレだ。今からの展開が、手に取るかのように読めるからだ。」

「ハル、と申します。美しい王妃様」

そんなあたしには気が付かず、当の本人は恭しくそう告げると、その場に跪き、姉様の手を取って甲に軽く口付けする。あたしはその様を黙って見つめる。

「……………」

そして潤んだ瞳で姉様の顔を見上げると、熱のこもった口調で姉様に語り始めた。

「私の胸は今、喜びと感動と、そして激しい愛の心が渦巻いております。お噂には聞いておりましたが、まさかガルダム王国の王妃様がこのような美しさだったとは…。これはもう、言葉では言い表せないほどです！！あなた様のその存在は、かの有名な美の化身、ヴェーナスですら、セイルーン様の前に跪くことでしょう」  
「まあ！！！」

こう見えても、おつむがちよつとあれそうに見えるんだけど、ハルはかなりの男前だ。彼のロシアン様と張るくらいだと思う。そんなイケメンにそんな甘い言葉を言われて、姉様が喜ばないはずがない。ぽつと少女のように顔を赤らめてハルを見ている。

「……」

「私の今までの人生は、まさにセイルーン様に出会うために会ったと言っても過言ではありません！ああ、あなた様がこの国の王のものだなんて、もう少し私たちが早く出会っていたなら！！神様も残酷な仕打ちだ」

「そんなこと…！？」

「……」

「しかし例え人のものだとしても、セイルーン様のお美しさには、一点の曇りもありません。例えこれが許されざる恋だとしても、私は構いません！！」

「……」

「この狂いそうなほどの恋心を胸に秘め、セイルーン様の幸せを願うこと、それだけを胸に秘め、私はこれからの人生を歩んでええぐじよぎゃあああああつっ！！！！！！！！！！」

きっかり三秒後。あたしのウルトラスペシャルマシンガンへピーキック（対最もうっとおしいハル用）が綺麗に腹に決まったハルは、回転しながらそれこそマシンガンの速さで後方にぶつとぶと、轟音を響かせながら白い壁にめりこんだ。固い石の壁に体が半分沈み込んだことから、その威力の強さも量り知れよう。

…だから嫌だったのだ。こうなることが分かっていたから。当の口説かれた姉様はというと、ぽかんとした表情で、ついさっきまで目の前にいたハルの残骸を見つめていた。

「ま、あいつのことは気にしないでください。ただの女好きの大馬鹿お間抜け死ぬほどうっとおしい阿呆野郎なだけですから」

「え、ええ、あの、そ、それよりハルさん、大丈夫なの？」

少しおろおろしながら壁を見つめる姉様。ハルは、というと、めり込んだままピクリとも動かない。確かに威力は強かった。いつもより。普段なら、そろそろ復活してあたしにつつかかってくるはずなのに、今回はそのままだ。ま、その方が静かだから別にいいんだけど。あいつは頑丈なので、こんなことぐらいで死にゃあしないさ。多分。

「あれくらいでぼっくり逝くようなタマじゃないんで、大丈夫ですよ。そのうちなぜか傷も全快した状態で生き返りますから」

「そんな、ゾンビみたいな」

「ゾンビみたいなものですよほんと。全く…毎度毎度あの調子で色々な女の子口説くから、困ったもんですよ。うっとおしいったらありやしない。あ、壁の修理費は、あの馬鹿ハルに請求してもらって構いませんから」

っていうか、全快したハルが、後で魔法でちよちよいと直すだろう

から問題ないだろう。むしろ直させる。

「今はあんな口説き魔のことはおいとして」

そう、あいつはどつでもいい。本題はここからだ。

## 姉との再会（2）

「実は、この方に今日は会ってほしくて」

そう言うと、あたしは同じく壁をおろおると困ったように見つめていたウィリアムに、姉様の視線を向けさせる。

「えっと…この、可愛らしい彼は？」

姉様の頭には？がたくさん浮かんでいる。そりゃあそうだろう。いきなり、会ったことのない人を紹介される訳だから。あたしはウィリアムに声をかけ、姉様の方に顔を向かせる。すると彼は、はっとなって、こつちを見た。その顔には、いささか緊張した様子が見られる。さて、なんと言えばいいものか。って考えたってどうしようもない。あたしは直球で話を持っていくことにした。

「姉様。彼の名前はウィリアム。ウィリアム・ゴードン・スリユートン」

「!?!」

名前を聞いて、はっとした表情になる姉様。それもそのはずだ。なんせ彼の名前は、王家直系の者しか名乗れないものなのだ。

「初めまして、セイルーン様。ウィリアム、と、申します」

緊張のあまり、少しだけ声を震わせながらウィリアムが頭を下げる。

「アイリーン、これは一体…」

「いいですか、姉様。これから言うことは、突拍子もないしにわか



「えつと、おい」

「私以上の美人なんて、身の回りにたくさんいる訳だし…。でも、あの方は側室も愛人も作らないって、結婚式の時に私に誓ってくれたのに！…いいえ、分かっているわ。私達は所詮、政略結婚。お互いの国の友好の維持と、王家存続のための子供を産むのが役目。よりたくさんの子孫を残すために、色んな女性と関係を持つことはある意味王の務め」

「…うん、どうしようか、ウィリアム」

「え、えと、僕に振られましても、その、どうしましょう」

「それはつまり、やはり私の力不足ということ！！それを口にしないあの方は、優しいというべきなのかしら…。いずれこんな時が来るのでは、という不安は常に持っていたわ。でもまさか、こんなに急に来るなんて。私、一体どうすればいいのかしら。ロシアン様のごことは確かに愛しているわ！！でもこんな仕打ち、あんまりだわ！！」

「セイルン様！！あなた様の心の苦しみ、私にはよく分かります！！どうぞ、私の胸で存分に涙をながええええ！！！！」

「あんたは勝手に一人で泣いとけっ！！っていかややこしくなるからでてくるな！！！！」

いつのまにやら復活して、姉様に胸を貸そうとしていた馬鹿者を、あたしは再度、今度は反対側の壁にぶつとばす。…全く、女性が絡むとめんどくさい男だ。

で、肝心の姉さまはというと、まだ一人涙劇場上映中だった。勘違いにも程がある。姉様、ロシアン様のこととなると本当に見境なくなるくらい愛しているらしい。熱々ぶりもここまでくると、もうぐうの音も出ない。が、このままにしとく訳にもいかず。

あたしは一つため息をつく、姉様の肩にポンと手を置いた。

「姉様」

「何よアイリーン。私はあの方に捨てられたも同然の、みじめな女よ」

「いや落ち着いてください。早合点しすぎですから。…あたしは彼のこと、ロシア様の隠し子なんて一言も言ってませんし、第一違いますから」

「？あら、そうなの？」

「っていつか、隠し子にはどう考えても大きすぎでしょう。15、6の子供って…。ロシア様が、12歳の時にできた子供って言いたいんですか？」

「！！それもそうね」

どうやら納得してくれたらしい。姉様はころつと笑顔になると、嬉しそうになっこり笑った。

「あら嫌だわ。私つたらつい勘違いを」

「んでそろそろ本題に入りますね」

やれやれ、ようやくここまで辿り着いた。あたしは一つ深呼吸して心を落ち着かせる。…よし。

「この先の森にある、眠り姫の城が先ほど、崩壊したのはご存知ですか？」

「ええ、さつき城の者から聞いたわ。ここからも、白い煙が見えたし」

そう言って指し示した先には、確かに例の森があった。ここは高台

の上だし、ロケーションはばっちりだろう。

「実はあたしたち、さっきまでそのお城にいたんです。眠り姫の封印を解くために。その呪いが解けたため、封印の力で保たれていた城が、年月に耐え切れず崩壊しました。そして……その眠り姫の正体こそ、このウィリアムだったんです」

「……………え？」

目をまん丸にして、あたしとウィリアムを交互に見やる。あまりにも突拍子もない話だ。それに彼は……

「何を言っているのアイリーン。第一、この子は男の子じゃない」

「はい。…彼は、ウィリアムは、昔この地に住んでいた性悪な魔術師から妹を守るため、自ら身代わりを買って出て魔術師を倒そうとしました。しかし彼は倒すことはできず、代わりに彼のかけた呪いを受けて300年もの間眠ることになったんです。その結果、世界には姫が眠りの魔法をかけられていると伝わった。実際は身代わりになったウィリアム王子だというのに」

「俺とアイリーンは、…多分お姉さんは知ってると思うけど、世界に散らばる呪われたもんを回収して回ってる。その目的のもんがある城にあったんだ。それでその封印を解いたらこの王子の眠りも解かれた。…かといって、はいさよならって訳にもいかないだろう？だからこうしてここに連れてきた。ウィリアムのたつての希望だったしな。残された家族が作った子孫たちの顔を見たいっていうな」

気付けばいつものまにやらまたまた復活していたハルが、あたしの言葉に補足を加える。

姉様はまだ少し混乱した様子で、それでも黙ってあたしたちの話を聞いている。

すると不意に、ウィリアムが姉様の前に膝き頭を垂れた。

「あまりにも突然な話です。信じていただけないのも重々承知ですが、僕は一目会いたかったんです。僕のいなくなった後に、スリユートン家がどうなったのか。僕の子孫はどう過ごしているのかですが、僅かな時間ながら300年経った街を歩き、行きかう人たちの顔を見て、それからあなたを見て。僕の子孫たちは立派に国を治めているんだって分かって安心しました。それを確認できただけでも僕は満足です。この国を守ってくれて、本当にありがとうございます」

するとその様子を見ていた姉様は、不意に口元を緩ませるとその顔に微笑みを浮かべた。

「…ウィリアム様、お顔をあげてください。私は別に信じていない訳ではありません。可愛い妹がこう言っているのです。疑う余地なんてありません」

そして姉様はウィリアムの前に膝を折ってかしまった。

「お会いできて光栄です、ウィリアム王子。残念ながら私は他の国からやって来た王妃です。王子の血を直接引くものではありません。ですが、スリユートン家は確かに繁栄を極め、その血を守って生きております。私の夫であり現当主でもあるロシアンはその誇りを胸に刻み、この国を守っております。あなた様の子どもたちは、立派に国を治めています」

そこにいたのはおのろけ全快のあたしの姉様ではない。国王ロシアンの妻であるセイルーン王妃の姿だった。凜とした表情で、しっかりと王子の目を見据え、彼女は言った。

「ウィリアム様が目覚めていただいて、私は本当に嬉しく思います。あなた様がいたから王家の血は守られ、ロシアン様はこの世に生を受け、私もこの国の一員になることができたのです。王子がいてくれてよかったです。本当に、ありがとうございます」

そしてその場で深々と礼をした。深い感謝の意を込めて。

その時のウィリアム王子の表情と言ったら。信じてもらえた喜びと、自分でも驚いているのかあっけにとられている顔が入り混じったななんと不思議な表情をしていた。

「なんにせよ、よかったな。信じてもらえて。さすがに相手は姫じゃなくて王子だし、いきなりすぎるから信じてくれないんじゃないかって思ってたけどもさ」

「ま、言ったのがあたしだし。ここで嘘つくメリットもないでしょう。それに……」

あたしはお互いに頭を下げあっているウィリアム王子の方を見やる。

「あの立ち振る舞い、あの風貌。彼が並みの人間じゃないってことくらい、分かるでしょう」

「なるほどな。確かに一般人じゃなさそうだ」

「そうそう、王族のオーラみたいなものも出てるし」

「お前と違ってな」

「…余計なこと言うと、またあその壁行きよ」

「……すまん嘘です悪かった。だから壁は勘弁してください。王族の住む城の壁だけあって、耐久性が半端なくいいからめっちゃ痛いんだよ」

「だったら余計なこと言わなきゃ&やらなきゃいいのに。なにまあたしは理由もなしに暴力をふるうような性格ではないのだ。」

「アイリーン、ハルさん」

あたしたちが小声ではそばそやっている間に。いつのまにやら、2人とも立ち上がり、こちらを見ているではないか。

「もう少ししたらロシアン様も帰ってくるわ。それまでここに滞在しないかしら」

「うーん、別に急ぎの旅ではないからあれだけど。でもまだやることはたくさんあるしなあ。けどさすがに王様に挨拶もなしに旅立つのはなあ。そう考え込んでいると、ハルがあたしの肩をポンとたたいた。」

「ま、いいんじゃないやねえの？二、三日のことだし、それにお前も久しぶりに愛しの姉様と過ごしたいだろ？」

「それはまあそうなんだけど」

「だったらお言葉に甘えようぜ。ここ最近順調に回収してきたんだ。少しくらい休んだって罰は当たんねえって」

「ハル……」

本当は泊まりたいと思っていた。けどやっぱり旅の途中だし、ハルも一緒だし、あたしの希望を強引に通すのもなあと思っていたところだったのだ。そう言われると、あたしも気持ち軽くなる。

「それに今晚、酒場のロレーヌちゃんとのデートの約束したし？もう少し彼女と遊びたかったからちよつどいい」

「本当の理由はそつちかい！！」

全く。そんなに女の子とデートしたいかこいつは…！？でも、お陰であたしは何の気兼ねもなくここにしばらくいられそうさだ。

## アイリーンの記憶 1

『昔々、はるか昔。この世界を脅かす邪悪な存在が、この地にはいた。彼らはこの世界を自分のものにしようと企み、あちこちで略奪を繰り返す。そんな非道なやり方を、抗う術のない人間たちはただただ黙って震えて見ていた。』

そんな中、救世主が現れる。後に彼らは邪悪な存在の頂点に立つ者、すなわち魔王を滅ぼし、この世を安泰に導いた。

彼らは勇者と魔術師。その圧倒的な力で、たった二人で世界を救ってしまった。

彼らの名前は明らかになっていない。しかも、気が遠くなるほど昔の話だ。それは伝説と言うより神話に近い。証拠も残っていない。

ただ、彼らの血を受け継ぐ子孫が、今でもこの世界のどこかで生きている、そう、人々の間で語り継がれてきた…』

「……………で？」

あたしは目の前の小男を見降ろすと、冷え冷えとした口調で問い詰める。

「そんな夢物語と、一体何の関係があるっての？」

するとそいつは今にも泣き出しそうな顔で必死に訴えてきた。

「で、ですからっ！！あなたがその伝説の勇者の末裔なんですか！！！」

大きなつぶらな瞳で見つめてくるそいつ。まだ12、3歳くらいだろうか。少年のようなあどけなさの残る顔は、愛嬌があつて非常に可愛い。これが姉様たち御一行なら、キョンとかなんかなつたりして許してあげるんだと思う。が。残念ながらあたしはそんなことで怒りを治めるほど、心が広くない。相手

が薄幸の美少年だろうがクマみたいなおっさんだろうが、これは断じて許しがたいことだ。

「あたしが伝説の勇者の末裔だと、百歩譲ってそうだとしても。それと、うら若き乙女の着替えを覗くのと、なんの因果関係があるのかって聞いているのよ」

この少年、あろうことか、部屋で着替えをしているあたしを側の木の上から覗いていたのだ。視線に気づいたあたしが傍にあった信楽焼の狸を投げて命中させ、下に落っこちた少年をただちに捕獲、連行してきた、という訳だ。

今はやつは抵抗することなく、あたしの部屋で正座させられながらあたしの尋問を受けている次第だ。

「うう、それは、その、あなた様が勇者の末裔である証拠を探すために痣を確認したくて」

「痣？」

「はい。……勇者とその連れれの魔術師には、体に魔王を倒した証としてある痣が刻まれたんです。それでその痣を探したんですが、見つからなくて。だからきつと、服に隠れた部分にあるはずだと思うって見ていたんです！！その、結果的には覗きのようなことになるん

ですが、決してやましい気持ちは」

「やかましい！！」

げしつ。めちやくちやな言い分に、思わず足が出てしまった。腹に衝撃を受けた少年はそれに耐え切れず、床の上で悶絶している。

「つぐう」

今度こそ、その大きな瞳から大粒な涙が流れだしていた。：これでも手加減したつもりなんだけど、いいところに蹴りが入っちゃったかなあこりゃあ。

それにしても、なんて壮大な言い訳だ。勇者とか魔術師とか、世界を救ったとか魔王とか。そんなもん、ただの夢物語だ。しかも、うちには選りすぐりの美しくも可愛らしいお姫様たちが山のようにいるのに、なんでわざわざあたしなんかを覗くのだ。よりによって、嫁にしたくないナンバーワンという不名誉な二つ名をもつ、このあたしを。

「とにかく！これは由々しき犯罪だわ。他のお姉さまや妹たちが次の被害者になる可能性もあるし、あんたはしばらく地下牢行き。：つてのもまだ若いし、かわいそうだから、二度と城に出入りしない。他の姫たちには近づかない、つて約束してくれるなら解放してあげてもいい」

どっから入り込んで来たのかは分からないけど、おそらく城の警備に穴があつたんだろう。今度からもう少し徹底させないと。警備さえ見直せば、今以上に厳しくなる包囲網を、少年が突破できる可能性は大いに低くなる。釈放しても問題ないはずだ。

すると彼は顔をあげてあたしの方を見る。あたしの寛大すぎる提案に感謝の意を示すべく、ではなく、口にした言葉は

「あの、それで、痣はありますか？」

「……………」

懲りないのか。認めたくないのか、少年は、いまだにそんなことを聞いてくる。あたしは一つため息をついた。こいつ、一体何がしたいんだろう。まあでも、教えて別に困ることがある訳でもないし、言えば少年も納得するだろう。あたしは質問に正直に答えた。

「あるわ。背中の中あたりに、手のひら大の痣がね」

「どんな痣ですか!？」

途端に食いついてくる少年。あたしは観念して、やっぱり正直に答える。

「まあ普通の赤い痣だけど。ただ、なんか羽みみたいな形ね。本当に背中から生えてように見えなくてもないデザインよ」

すると少年の口から「やっぱり…」という声が小さく漏れる。その目はあたしからそらされ、どこか遠いところを見つめている。…なにがやっぱりなのか、あたしにはさっぱりなんだけど。まったく話が見えない。この期に及んで、あたしは勇者説を証明するための覗きとしたいんだろうか。

でもまあいいか。これでこいつも納得しただろう。あたしの痣の有無を聞けたんだから。あたしは少年を立ち上げらせようと声をかける。

「さあ、もういいでしょう？これからもう二度と覗かないって誓って」

「ただ、彼はさっきとは打って変わって落ち着き払った表情をしている。そしてどこか安堵したような色合いを含めて。」

「なんていうか…この年頃の子には似つかわしくない表情だ。大人びてる。18、9、いやそれ以上…。」

「その貫禄に密かに驚いていると、少年はいきなりにこりと笑った。そしていきなり土下座してきた。」

「え、ええ、なんのつもり！？謝ったって許すわけには」

「い、い、いえ、確かに覗いてしまったことに対しては謝罪しないといけません…。これは感謝を示すものです！！」

「感謝…!？」

「まったく、ちんぷんかんぷん。覗き魔に感謝されることなんて、どいう意味だ！？聞いただすよりも早く、少年は言った。」

「これで安心して報告ができます。よかったです。ああああ、あ、あの方の鉄拳、あたるとう3日ほど再起不能になるんですね」

「あなた…」

「それも、えつと、きつと、近いうち、それもすぐにでもあの方がアイリーンさんのところに来られる

と思います。その時に詳しい事情は説明されると思います。では、僕はこれで」

「あたしは何が起こったのかまるで分からなかった。いや、分かりたくなかった。」

魔法は素晴らしいものだけど、万能ではない。炎や水は起こせるが、できないこともたくさんある。魔法は使えないあたしだけど、知識としては頭に入っている。空間移動も、その一つだったはずだ。けれど、今まで詰問していたはずの少年の姿が今はどこにもない。いない。

突然そいつは、あたしの前から姿を消したのだ。まるで最初からそんなもん存在しなかったかのように。

「……………な、な、なんあのよ、あの少年は一体……」

あたしの独り言だけが、むなしく部屋にこだまする。

少年の言葉が真実だったと知ったのは、それから数時間後のことだった。

## ハルの記憶 1

遙か昔、人間界を征服しようとした魔王が、勇者の剣によって倒された。魔王はその魂と強大な魔力を勇者の剣に封じられ、体は消滅。それと同時に、人間界と魔界をつなぐ扉も閉ざされた。

残ったのは、魔王の力がそのまま乗り移った勇者の剣。それも今や、魔力によって人に悪影響を及ぼす『魔剣』と成り下がった。

神官どもは考えた。

この剣をこのまま保管するのは危険だ。

これがもし誰かの手に渡れば、そいつは魔王と同等の力を持つことになる。じゃあどうしたか。神官どもは考えた結果、その力を剣を含めた12の物に分散して封じた。

更にか所にとどめておくのも危険だと、世界中の12の場所に、それぞれを封印した。

時は流れ、それらは盗難や売買によって元の場所から姿を消す。

やがて力を持つそれらは、『呪われた』物として世にその名をとどろかせることになる。

例えば彼の有名な、『アングレット王妃の首飾り』もその一つだと言われている。その場にいる人々を魅了する怪しげな美しさを放ち、つけた人間はたちまち社交界の花となる。だが所有者の寿命を数倍もの速さで奪う。首飾りが命を吸い取っているのだ。その結果首飾

りは更に神秘的な美しさを纏い人々を魅了する。初めて手にした悲劇の王女、アングレット王妃の名前からそう呼ばれるようになった。

これらの物は、魔王の力を所有するがゆえに人間の手には負えず、手にした者を破滅へと導く。それでも人間は手を伸ばすことをやめない。全く、人というのはどこまでも愚かだ。

なんでそんな話を今してるのかつて？

決まってる。今、目の前でその話をされてるからだ。

俺の名前はハル。生まれも育ちもゼボン大陸内にあるベイリー王国。世界でもっとも偉大だと言われている10代魔法使いシャーリーの一番弟子であり実の息子でもある。

今日も俺は、いつものように魔法の訓練に明け暮れてたんだが。

突然現れた黒い光球に追突され、意識が飛んで、気付けば俺は今、知らない場所に来ていた。そしてなぜかむさくるしい外見のおっさんから、この話を語られている最中だ。

おっさんによると、俺たちは昔話に登場する、魔王を倒した勇者と魔術師の末裔なんだと。

達って言うのはもちろん俺と、それから横にいる見ず知らずの女の子だ。

それで、俺たちにその呪われたアイテムに封じられた魔王の力とやらを回収してほしいと頼みに来たという。

ちなみにこいつ、人間じゃねえ。

背中には夜の帳よりも深い闇色の翼。肌は褐色で、髪も目も暗闇に

染まってる。おっさんは自分を、魔族だと言う。そりゃそうだろう。こんな人間見たことないし。

仮にその話が本当だとして、魔族が何でよりにもよって、敵だった勇者と魔術師の子孫にそんな話持ちかけてくる？

女がそう聞くと、魔族は複雑な面持ちで語りだした。

「魔王様が人間界に封じられて早1000年。王不在の魔界では、上に立つ器の者がおらず、各地で争いが起き、政治は乱れ、民は乱れ、土地は狂い。混沌を極めております。魔界は特に力のあるなしで全てが決まる世界。魔王様は確かに無謀で我がままで、我々が止めるのも聞かず勝手に人間界へ行かれるような破天荒なお方でしたが、またあれほど力のある魔族もおりません。今の魔界を束ねられるのは、あのお方しかおられないのです」

だから、俺たちに魔王の力を解き放ってほしい。

相手は魔族だ。一度は人間の世界を脅かした、人類の敵。だが嘘を言っているようにも見えない。真摯な瞳でどこかすがるように俺たちを見ている。

しばらく訪れた沈黙を破ったのは、女だった。

「なら自分達ですればいいじゃない」

確かに。わざわざ敵に頼むことでもないだろう。自分らで回収してそのまま魔界へお帰りになればいい。だが、やっぱり悲痛な面持ちで、どこか絞り出すような声で魔族は答えた。

「できるならとつくにそうしてます。ただ、魔王様のお力はあまりにも強すぎて、我々では触れることすらできません。他の人間たちと同じく、魔力の強さに当てられ、狂い、死んでしまうでしょう。それほどあの方のお力は毒なのです。ただ、勇者ならば可能です。勇者はどうも魔王様のお力の影響を受けなかったようで、その為直接剣を刺して魔王様を封じることができたのです。ですから、直接魔王様を封じた勇者様の血を引くあなたにしかできないことなのです。他にできるとしたら、魔王様本人だけでしょう」

勇者の末裔…ってのは俺じゃない。横の女の方だ。じゃあ俺はいらないんじゃないの？そう思ったのが顔に出てたのか、魔族はこっちにも視線をやった。

「そして魔王様のお力を感知できるのが、魔術師の血を引くあなた様なのです。我々は人間界では能力がかなり落ち込んでしまいます。その為魔王様のお力を、この世界では感じる事ができません」

つまり、ナビゲーターか。封印を解除するには必要ないが、それまでの道のり、前座要員と。

魔族はその後色々言っていたが、結局俺たちに魔王の力を解除してほしいと繰り返し、また後日改めて来ると残してその場から消えた。

消失。

どんなに魔術が発達しても消して人にはできない技。

まあ俺を抱えて遙か遠い国まで転送するくらいだから、やっぱりあいつらは人間じゃない。

どうせなら俺を元の場所に戻せ、って思ったが、文句を言う相手は

もういない。

正直、俺が英雄と呼ばれた魔術師の末裔っていうのが嘘だろうが本当だろうが、どうでもいい。英雄の血を引いてるから、世界中に散らばる魔王の力を回収してくれて、ベタすぎて吐き気がする。とんだお伽噺だ。

だが、数日後にくるってことは、それまで俺はここにいなきゃなんねえってことだろう。

めんどくせえ。

元いた場所の近くなら、んな話し聞かずとつと帰るところだが。さっきの話からして、そんな簡単に帰れる場所じゃないことは分かってる。

おそらくここは、サイレン王国の首都。

サイレンと言えば、東に浮かぶ小さな島国で、国土面積こそ小さいが天然資源にありったけ恵まれて、世界中の国々と交易がある超やり手な国だ。特に今の王は国交作りに熱心で、数十もの国に友好のあかしとして娘たちを嫁がせて、世界中に遠戚を作ってるらしい。

一方俺の住んでたのはベイリー王国。ここからは2つの海と5つの山を越えた果てしなく遠い距離の先にある国だ。つまり、数日で帰れる距離じゃない。

俺は思わず頭を抱えてため息を漏らす。全くどうしろって言うんだと。

「あの…」

今日に入って幾度となく聞いた声。俺は横を見る。猫目がちな緑の瞳が俺をじっと見つめていた。彼女は困ったように微笑むと、後ろを指さしながら言った。

「とりあえず、中に入りませんか？もうすぐ雪が降りそうですし」

彼女の指した先には、空高くそびえる、巨大な城があった。

## アイリーンの記憶 2

意味不明だわ。何この急展開。

あたしはまじまじと目の前の中年男性を見つめる。そのうしろには、あたしがさつき逃がした覗き魔の少年が、隠れるように立っている。

彼らの背中には、どう考えても翼にしか見えない黒い物体。成程、少年は比喩抜きで覗き「魔」だったらしい。

あたしはおじさんから紡がれる果てしないストーリーを、ただ黙って聞くしかなかった。だって、唐突過ぎる。一体どうしると？ それから言いたいことだけ言つと、「また来る」と言つて消えてしまった。

残されたのはあたしと、それから赤い髪の毛の青年。

この人、さつきおじさんと一緒に空から降つて来たのよね。どうやらあたしが勇者の末裔で、彼は魔術師の末裔らしいんだけど…。

ちらりと視線を向けると、彼は何を考えてるのか分からない表情で、魔族たちが今までいた場所を見つめていた。

あたしに分かること。

少なくとも、この人はこの国の人間じゃない。

あたしたちには身体に特徴的なものがある。

この、亜麻色の髪と緑の瞳だ。国民のほとんどがそれにあてはまっ  
ていて、例えば他の人種との間に子供が生まれてもこの色になるとい

う超優性遺伝。

だけど、彼は燃えるような赤い髪の毛と、おそろいの赤い瞳。かなり遠いところから、彼らによってここまで飛ばされたんじゃないかと推測できる。

うーん、とりあえずどうしたらいいかな。と、急に体がぶるつと震える。

今は12月。空を仰ぐと、灰色の冬景色の空。風もさつきよりも冷たいし、一雪振りそんな気配がする。

いつまでもここにいたってどうしようもない。幸いにもあたしの住居はこのすぐ後ろだ。あたしは隣の青年に声をかけた。

「とりあえず、中に入りませんか？もうすぐ雪が降りそうですし」

暖炉の灯された暖かい部屋に移ると、とりあえず、とあたしたちは自己紹介をすることにした。

「あたしに名前はアイリーン・セシル・サイレン。ここサイレン国の王女よ」

「…やっぱりここはサイレンか。遠いところまでとばされたな」

男は苦々しげに舌打ちをする。思った通り、彼はこの辺りの出身じゃないらしい。

「ちなみにどこから来たの？」

「俺はベイリー王国だ」

「ベイリー！？」

おったまげた、びっくりしすぎて思わず心臓が喉から飛び出しそうになる。

もちろんその国の名前は知ってる。知ってるけど、どう考えたってすぐ来られる距離じゃない。少なくとも半年はかかる。

「俺の名前はハルだ。ちなみに職業は魔術師。あんたは王女様だったんだな」

「ええ、一応。それにしても魔術師なのね」

これなら、あの魔族の言ってた魔王を倒した魔術師の末裔つても納得できるかもしれない。そう思ってたのが顔に出たのか、ハルはあたしを見ると面倒くさそうな表情で言葉を口にした。

「言っとくけど、別に俺、そんなに強くないから。そんな、魔王を倒した魔術師って程の実力ねえし」

それから頭をかきむしると、だるそうにあくびをした。

「今日はほんと、色んな事がありすぎ。正直疲れたわ。悪いけど、どっか部屋貸してくんねえか？昨日もちよっと色々あって寝不足なんだわ」

「へ？あ、ああ、もちろん。すぐに用意させるわ」  
「助かる」

あたしは慌てて立ち上がると、廊下に控えていたメイドに部屋を準備するよう指示をする。

それにしても。あたしは扉を閉めると、そっと男の方を見やる。

あたしとしては、あの魔族の話を聞いてどう思ったかとか、これからどうしたらいいのかとか色々話そうと思っていただけ、そんな雰囲気じゃない。っていうか、あのハルっていう男、あたしは苦手だ。まだ会ったばかりであれだけ。

顔はすごく男前で、かっこいいんだけど、なんていうか他人を寄せ付けないオーラがあるような。それに色々と無関心な感じもする。自分の身に起こったことだっていうのに、どうも冷めてるし、どうでもよさげなんだよね。

でもあたしはめげずに話しかけてみる。

「ねえ、これからどうするの？」

すると皮肉めいた笑顔をあたしに返すと、

「どうするもこうするも。あの魔族、また来るんだろ？どうせどこか行ってたつてここに連れ戻されるんだろっし、しばらくはここに厄介になりたいんだけど」

「それはもちろん大丈夫だけど…。あの、魔族の話、どうするの？」  
「正直どうでもいい。俺は元の場所に戻ればそれでいいから」

ぱっさり一言。それだけ言い残すと、ハルはそのままあたしの横をすり抜けて、廊下へと消えた。

「……………」

なんなのあの男。本当に。

本当に本当に、心底どうでもいいらしい。自分が偉大なる魔術師の末裔だろうが、そうじゃなかるうが、ここがサイレン王国だろうが、自分がいるのは王が住む城の中だろうが。要は元のベイリーに帰れさえすれば。

でも普通はそうかもしれない。あたしだって、あまりに話が飛躍しすぎてて、現実味がない。

あたしは再び元いた椅子に座ると、少しさめてしまった紅茶のカップを手にとる。

それから考える。

あたしは一体どうしたらいいんだろう。

そもそもあの話が本当かも分からない。

分からないし、もし彼らの言う通り、世界に散らばる12の魔王の魂の封印を解けるのがあたしだとして、それを受け取った彼らが魔王をこの世に復活させて、また人間界を滅ぼそうとするかもしれない。なんせ相手は魔族だ。両手をあげて信用できるものでもない。

だけど、嘘だっという気もしないんだよね。目は必死だったし、今にも泣きそう。それが演技だっって言われたらそれまでだけどさ。

しかしあたしが勇者の末裔ねえ。

ちなみに今まで剣なんて持ったこともない。剣術を習ったこともないし。

あのハルみたいに、本業は魔術師ですってんならともかく、剣を持つたことのないずぶの素人が世界を救った剣を持つ勇者だなんて、あり得ないと思う。

でもあの魔族たちはあくまでもあたしたちがその英雄の末裔だって

言い張るし…。

うん、うん！

考えたって仕方がない。

とりあえず、数日後にもう一回来るって言うんだから、その時に無理です、とかなんとか言ってお断りすれば済む話だ。

そうと決まれば。

あたしの体は今まで緊張してたのが解けたのか、急におなかがなりだした。

全くげんきんな体だ。ちょっと早いけど、もうディナーにしようかな。

あのハルの分は……。ひと眠りするって言ってたし、別にいいか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1476z/>

---

勇者と魔術師のぶらり世界旅行

2011年12月8日03時57分発行